松山市埋蔵文化財調査報告書45

石井幼稚園遺跡
南中学校構内遺跡

—第２次調査—

１９９４

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

石井幼稚園遺跡
南中学校構内遺跡

—第２次調査—

１９９４

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　石井幼稚園遺跡ＳＢ－１出土の土師器

巻頭図版２　石井幼稚園遺跡ＳＤ－１出土の施釉陶器

序

この報告書は、松山市教育委員会が松山市石井地区で実施した２遺跡の調査成果をまとめたものです。そのひとつは昭和60年に石井幼稚園園舎改築に際して行われた発掘調査で、出土した遺構・遺物は古墳時代・平安時代・中世の各期にわたっていますが、とりわけ遠隔地からの搬入土器を伴う平安時代の一括遺物は、松山平野の古代後期から中世の土器編年の基準資料として、また各地との交流を考えるうえでも貴重な資料として発見当初より注目を浴びていたものです。

また、昭和61年実施の南中学校構内の調査では弥生時代前期の良好な一括遺物の出土をみており、近年めざましく進んでいる弥生土器の編年にとって欠かせない資料となるものと期待されます。

このたび、かねてから注目されていたこれら２遺跡の調査成果を報告書として刊行できますことは、わたくしどもにとって大きな喜びであります。本書の刊行にあたってご助言いただいた各方面の方々にお礼を申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財保護、教育文化の向上に寄与することを期待しております。

平成６年８月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田　中　誠　一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会が松山市石井町所在の石井幼稚園構内において昭和60年に実施した発掘調査と、同市東石井町所在の松山市立南中学校構内において昭和61年に行った発掘調査の報告書である。

2．松山市における埋蔵文化財調査部門の松山市教育委員会文化教育課から財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターへの平成３年度移行に伴い、本書の刊行は同財団が行った。刊行にあたっての組織は以下のとおりである。

刊行主体　財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田中誠一
事務局長　一色正J:
埋蔵文化財センター　所　長　河口雄三
次　長　田所延行
調査係長　田城武志
調査主任　栗田正芳（文化教育課職員）
担　当　調査員　栗田茂敏

3．使用した方位は、すべて磁北である。

4．遺物の実測・製図は、栗田茂敏、水口あをい、兵頭千恵、西岡早苗、松山桂子、三木和代、山下満佐子が行い、遺構の製図は栗田茂敏、小坂ゆかりが行った。

5．写真は遺構を栗田茂敏が、遺物を大西朋子が撮影した。

6．本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

7．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されており、その一部は付設の考古館において展示公開されている。

本　文　目　次

遺跡をめぐる環境……1

石井幼稚園遺跡

Ⅰ　調査に至る経緯と組織……7

Ⅱ　調査の成果……9

1．層　序……11

2．古墳時代……11

3．平安時代……15

4．中　世……24

Ⅲ　考　察……27

1．遺跡の評価……27

2．松山平野出土の古代後期から中世の土器……27

南中学校構内遺跡第２次調査

Ⅰ　調査に至る経緯と組織……39

Ⅱ　調査の成果……41

1．層　序……41

2．遺構と遺物……45

Ⅲ　まとめ……55

抄　録……56

図　目　次

図１　調査地の位置と周辺の遺跡分布……2

石井幼稚園遺跡

図２　遺構の全測と調査地西壁の土層……9

図３　竪穴住居ＳＢ－１……12

図４　ＳＢ－１遺物出土状況……13

図５　ＳＢ－１出土遺物(1)……14

図6　ＳＢ－１出土遺物(2)……15
図7　ＳＢ－１出土遺物(3)……15
図8　ＳＤ－１平・断面図……16
図9　ＳＤ－１出土遺物(1)……17
図10　ＳＤ－１出土遺物(2)……18
図11　ＳＤ－１出土遺物(3)……19
図12　ＳＤ－１出土遺物(4)……20
図13　ＳＤ－１出土遺物(5)……21
図14　ＳＤ－１出土遺物(6)……23
図15　ＳＤ－１出土遺物(7)……23
図16　ＳＤ－１出土遺物(8)……23
図17　土壙ＳＫ－１……24
図18　ＳＫ－１出土遺物……24
図19　土壙ＳＫ－２……25
図20　ＳＫ－２出土遺物……25
図21　柱穴出土遺物……26
図22　石井幼稚園遺跡ＳＤ－１出土遺物……28
図23　筋違Ｇ遺跡ＳＰ－５出土遺物……29
図24　古照遺跡７次調査Ｂ区ＳＫ－９出土遺物……29
図25　古照遺跡８次調査ＳＫ－１出土遺物……29
図26　石井幼稚園遺跡ＳＫ－２出土遺物……30
図27　南江戸瓦目遺跡土器集積遺構出土遺物……31
図28　久米窪田古屋敷遺跡Ａ区ＳＤ－３出土遺物……31
図29　久米小学校構内遺跡２次調査出土遺物……32
図30　久米窪田森元遺跡ＳＤ－４出土遺物……33
図31　鷹ノ子遺跡１次調査ＳＫ－３出土遺物……33
図32　石井幼稚園遺跡ＳＫ－１出土遺物……34
図33　拓南中学校構内遺跡ＳＫ－２出土遺物……34

南中学校構内遺跡第２次調査

図34　調査地の位置……40
図35　遺構の全測と調査地北壁の土層……41
図36　ＳＤ－１遺物出土状況……43
図37　ＳＤ－１出土遺物(1)……46
図38　ＳＤ－１出土遺物(2)……47

図39　ＳＤ－１出土遺物(3)……48
図40　ＳＤ－１出土遺物(4)……50
図41　ＳＤ－１出土遺物(5)……51
図42　ＳＤ－１出土遺物(6)……52
図43　ＳＤ－１出土遺物(7)……53
図44　ＳＤ－１出土遺物(8)……53
図45　ＳＤ－１出土遺物……54

図　版　目　次

巻頭図版１　石井幼稚園遺跡ＳＢ－１出土の土師器
巻頭図版２　石井幼稚園遺跡ＳＤ－１出土の施釉陶器

石井幼稚園遺跡

図版１　石井幼稚園遺跡１　調査前全景（東より）
調査前全景（西より）
図版２　石井幼稚園遺跡２　ＳＢ－１遺物出土状況(1)（東より）
ＳＢ－１遺物出土状況(2)（南より）
図版３　石井幼稚園遺跡３　ＳＢ－１遺物出土状況(3)（南東より）
ＳＢ－１完掘状況（東より）
図版４　石井幼稚園遺跡４　ＳＤ－１遺物出土状況(1)（南より）
ＳＤ－１遺物出土状況(2)
図版５　石井幼稚園遺跡５　ＳＤ－１遺物出土状況(3)
ＳＤ－１遺物出土状況(4)
図版６　石井幼稚園遺跡６　ＳＤ－１完掘状況（南より）
ＳＫ－２遺物出土状況（北より）
図版７　石井幼稚園遺跡７　ＳＢ－１出土遺物(1)
図版８　石井幼稚園遺跡８　ＳＢ－１出土遺物(2)
図版９　石井幼稚園遺跡９　ＳＤ－１出土遺物(1)
図版10　石井幼稚園遺跡10　ＳＤ－１出土遺物(2)
図版11　石井幼稚園遺跡11　ＳＤ－１出土遺物(3)
図版12　石井幼稚園遺跡12　ＳＤ－１出土遺物(4)
図版13　石井幼稚園遺跡13　ＳＤ－１出土遺物(5)
図版14　石井幼稚園遺跡14　ＳＤ－１出土遺物(6)

図版15　石井幼稚園遺跡15　ＳＤ－１出土遺物(7)
図版16　石井幼稚園遺跡16　出土遺物（86～88：ＳＤ－１、89：ＳＫ－１、90・91・93：ＳＫ－２、94：Ｐ－３）

南中学校構内遺跡第２次調査

図版17　南中学校構内遺跡第２次調査１　調査前全景（南西より）
調査前全景（北東より）
図版18　南中学校構内遺跡第２次調査２　ＳＤ－１遺物出土状況(1)（西より）
ＳＤ－１遺物出土状況(2)
図版19　南中学校構内遺跡第２次調査３　ＳＤ－１遺物出土状況(3)
ＳＤ－１遺物出土状況(4)
図版20　南中学校構内遺跡第２次調査４　ＳＤ－１遺物出土状況(5)
ＳＤ－１遺物出土状況(6)
図版21　南中学校構内遺跡第２次調査５　遺構全景(1)（北西より）
遺構全景(2)（北より）
図版22　南中学校構内遺跡第２次調査６　遺構全景(3)（東より）
遺構全景(4)（西より）
図版23　南中学校構内遺跡第２次調査７　ＳＤ－１出土遺物(1)
図版24　南中学校構内遺跡第２次調査８　ＳＤ－１出土遺物(2)
図版25　南中学校構内遺跡第２次調査９　ＳＤ－１出土遺物(3)
図版26　南中学校構内遺跡第２次調査10　ＳＤ－１出土遺物(4)
ＳＤ－３出土遺物

遺跡をめぐる環境

西部瀬戸内にあって、最も広大な平野である松山平野はその東部を高縄山系に限られ、西方の伊予灘に向かって開けている。平野内には、東方の高縄山系に水源を発する二大河川、石手川・重信川をはじめとして、小野川・久万川・堀越川・内川等の中小河川がそれぞれこれらの二大河川に合流、あるいは分流しつつ西方の海岸線へ向かって注いでいる。遺跡は、平野中央部を西流する小野川左岸、南部を西流する重信川右岸の沖積地、海抜21mに所在する。

遺跡周辺に限らず、松山平野においては旧石器時代の遺跡はよく知られていないが、散発的な遺物の採集例は当遺跡周辺にもみられる。東方1km内外に所在する天山・東山・星ノ岡は、「伊予国風土記逸文」において伊予の三山と呼称され、数多くの中・後期古墳が丘陵上に存在するのをはじめとして、弥生時代の遺構群の存在や中世古戦場址として知られているが、このうち東山丘陵における古墳群の調査、東山鳶が森古墳群[1]調査中に墳丘盛土内よりサヌカイト製ナイフ形石器が採集されている。また、この東山丘陵の北方に近接する天山丘陵での弥生時代遺跡の調査、天山天王ケ森遺跡[2]においてもサヌカイト製ナイフ形石器1点の出土が知られている。

両遺跡の所在する石井地区やこの近郊における発掘調査例はさほど多いものではなく、縄文時代の遺構や遺物の出土はみられていない。該期の遺跡は調査地の北部を西流する小野川を東方へ2～3km遡った来住・久米地区の微高地縁辺部に営まれている。後期の土壙が検出された久米窪田森元遺跡[3]、この遺跡に近接して竪穴住居址の検出をみた久米窪田Ⅰ遺跡[4]、晩期後半の土壙検出の南久米片廻り遺跡2次調査地[5]等がそれである。また、最近になって先述の東山丘陵上で晩期の石詰土壙墓が検出されている[6]。

周辺の弥生時代の遺跡には前期前葉の壺棺墓の検出で知られる石井東小学校遺跡[7]がある。この遺跡では、そのほか9棟の竪穴住居址が検出され、古墳時代前期のものとされているが、出土遺物や隅丸方形状のプランから判断すると弥生時代終末期に属するものと考えるのが妥当であろう。この石井東小学校遺跡と同時期の遺跡には竪穴住居址や土壙墓検出の西石井荒神堂遺跡[8]がある。また、東方の天山天王ケ森遺跡では後期初頭を主体とする時期の土壙墓や竪穴住居址が検出されている[9]。

調査地周辺では、古墳時代の集落として知られているものはない。先述の石井東小学校遺跡の弥生集落が廃絶して後、5世紀後半になって円墳2基が営まれていたことが周溝の検出によってわかっている[10]。冒頭に述べた東方1.5km内外に所在する伊予三山と呼ばれる独立丘陵上には、後期群集墳を主とする数多くの古墳が造営されているが、なかでも天山丘陵上にあって環状乳神獣鏡を出土した天山神社北古墳[11]や東山丘陵の後期群集墳東山古墳群[12]がよく知

られている。古墳時代や古代の遺跡群はこれらの丘陵のさらに東方の微高地上に分布しており、調査地の近辺では知られていない。

古代の松山平野は和気、温泉、久米、伊予、浮穴の５郡からなっており、調査地周辺は久米郡石井郷に属している（平城宮出土木簡によると石井郷は一時期伊予郡に編入されていた可能性もあるという）。この石井郷内には延喜式内社「伊予豆比古命神社」が存在し、両調査地の至近の距離のうちにある。また、８世紀代の文字史料として正倉院文書や平城宮出土

1　石井幼稚園遺跡
2　南中学校構内遺跡
3　西石井荒神堂遺跡
4　伊予豆比古命神社
5　天山神社北古墳
6　天山天王ヶ森遺跡
7　東山古墳群
8　石井東小学校遺跡
9　南久米片廻り遺跡２次調査地
10　来住廃寺
11　久米窪田森元遺跡
12　久米窪田１遺跡

図１　調査地の位置と周辺の遺跡分布

木簡には、石井郷を本貫とする阿曇部太隅、田部直足国・五百依などの地方豪族の存在を散見することができる[12]。

さらに中世、承久の変に際し、後鳥羽上皇にくみして幕軍に本拠高縄山城を攻略され、奥州平泉に流配となった在地豪族河野通信・通政親子に反して、その子通久は関東方に付き、その結果久米郡石井郷の領有が認められ、この地の丘陵上に縦淵城を築き本拠とした。この城跡は、丘陵ともども1888（明治21）年、土佐街道（現 国道33号線）建設の際に破壊されたといわれ[13]、現在では残存していない。1894（明治27）年宮脇通赫によって編まれた『伊豫温故録』[14]には、その位置について「東石井村の北方小野川の南側にあり」と記されている。

註

① 西尾幸則　他　『東山焼が森古墳群調査報告書』　松山市教育委員会　1981
② 「天山天王ケ森」『松山市史料集　第二巻　考古編　II』　松山市教育委員会　1987
③ 栗田茂敏　「久米深田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報　II』　松山市教育委員会　1989
④ 『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書　II』　愛媛県教育委員会・(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター　1981
⑤ 松村　淳・山本健一　「南久米片廻り遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　III』　松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991
⑥ 山城武志　「東山古墳群６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　V』　松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター　1993
⑦ 「石井東小学校遺跡」『松山市史料集　第二巻　考古編　II』　松山市教育委員会　1987
⑧ 森　光晴　『浮穴・西石井荒神堂・東本II・III・桑原高井遺跡』　松山市教育委員会　1980
⑨ 森　光晴　「天山天王ケ森遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』　1986
⑩ 前掲註⑦文献
⑪ 長井数秋・森　光晴　他　『天山・櫻谷遺跡調査報告書』　松山市教育委員会　1973
⑫ 前掲註①文献
⑬ 「王朝国家の展開」『松山市史　第一巻　自然・原始・古代・中世』　松山市教育委員会　1992
⑭ 「律令成立期の道後平野」　〃　〃　〃　〃
⑮ 宮脇通赫　『伊豫温故録』　1894

石井幼稚園遺跡

石井幼稚園遺跡

I　調査に至る経緯と組織

1985（昭和60）年、松山市教育委員会（以下、市教委）は、松山市西石井町9番地所在の石井幼稚園園舎改築を計画した。この地点は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地のうち、「119 西石井遺物包含地」に含まれる。市教委文化教育課は、同年6月、松山市長　中村時雄（当時）より提出された確認調査申請に基づきトレンチによる試掘調査を行ったところ、申請地の特に西部において中世遺物を包含する土層、ならびに柱穴が確認された。

この試掘結果を受けて、市教委は園舎建設に先立ち、申請面積1738㎡のうち430㎡を調査対象として緊急発掘調査を行うこととし、同年6月20日から7月10日の間、下記の組織で実施した。

調査主体　松山市教育委員会

	教育長	西原多喜男
	教育次長	井出　治巳
	文化教育課長	木下　正史
	課長補佐	坪内　晃幸
	第二係長	大西　輝昭
	主　任	西尾　幸則
調査担当	調査員	栗田　茂敏
	〃	松村　　淳

作業員　（屋外調査）　浅田慎一・石丸直樹・猪森龍彦・岡本　良・木下公一・栗田正芳・仙波泰三・高尾和長・宮内慎一・渡部一朗

（屋内整理）　池田典子・大西直栄・小坂ゆかり・田所ひろみ・丹生谷道代・丸山美和

調査地　松山市西石井町9番地

調査面積　430㎡

調査期間　1985（昭和60）年6月20～7月10日

謝　辞

出土遺物について、以下の方々に貴重なご指導、ご助言をたまわった。記して感謝申し上げます。

森島康雄／(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

百瀬正恒・吉村正親／(財)京都市埋蔵文化財研究所

門田卓哉／仏教大学

近江俊秀／奈良県立橿原考古学研究所

尾上　実／大阪府教育委員会

鋤柄俊夫／(財)大阪文化財センター

橋本久和／高槻市立埋蔵文化財調査センター

福田正継／岡山県古代吉備文化財センター

鈴木康之／広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

片桐孝浩／(財)香川県埋蔵文化財調査センター

松田直則／(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

中野良一・柴田圭子／(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

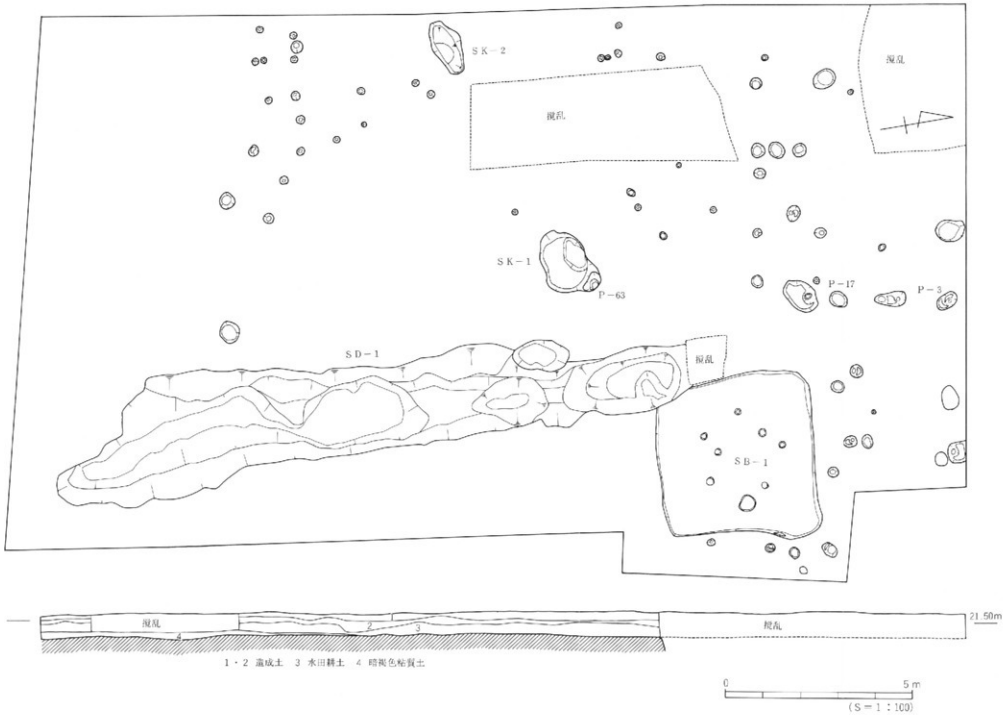


図2　遺構の全測と調査地西壁の土層

調査では、古墳時代の竪穴住居址、平安時代の溝状遺構、中世以降の土壙、柵列やその他の柱穴を検出している。以下、調査地の層序、ならびに各遺構について時代ごとに解説する。

1．層　序（図2）

調査地は、松山平野中央部にひろがる重信川の氾濫原上、海抜21ｍに立地している。旧水田耕土面上に客土造成がなされ、厩舎や遊具による攪乱がかなり深くまで達している部分もある。水田耕土下層には、古代・中世の細片遺物を包含する第4層暗褐色粘質土が10～20cm堆積し、この第4層下層の灰黄色粘質土面で遺構が検出された。試掘調査の結果、対象地の東半には、この遺物を包含する第4層は存在せず、基盤面となる灰黄色粘質土を抉り取るように無遺物の含礫黒色粘土層が堆積している。したがって、この部分は調査対象とはせず、用地西半部約430m²の調査を行った。

2．古墳時代

竪穴住居ＳＢ－１（図3・4）

調査地北東隅部で検出された一辺4ｍを測る方形竪穴住居址で、北東コーナーが若干張り出したプランをなしている。立ち上がり10～15cm程度の遺存で、周壁溝は持たない。埋土は、遺構面を覆う中世遺物包含層暗褐色粘質土とは異なり、黒色粘質土である。床面には、8基の柱穴が掘り込まれているが、その埋土からこの住居に伴うものはＰ－１～４の4基であると判断される。その他の柱穴は住居址を切っている。

床面直上から土師器、砥石、滑石製臼玉、碧玉製管玉を出土しているが、主柱穴の外側、立ち上がりに沿って配置されたような状況で出土しており、原位置をとどめている可能性が高い。これらの土師器から、古墳時代中期の遺構である。

ＳＢ－１出土遺物（図5～7）

土師器（図5）

壺（1・6）　大型の二重口縁壺1と、小型の直口壺6の2点が出土している。1は後述の高坏3、甕5とともに北東コーナー部床面より口縁部を下に倒立した状態で出土したが、下半部を削平されて失っている。口径19.5cm、胴部最大径33.6cm、残存高27.0cmを測る。球形の胴部から外上方に強く屈曲した短い頸部を経て、外面に稜を有する口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。口端部は面取りされ、上方に平坦な面をなす。口頸部の内外面は横撫で、胴部の外面の調整は器表面の摩滅のため不詳、内面は削られ、特に胴下半部の器壁は非常に薄く仕上げられている。胎土には多くの石英、長石粒を含み、大きなものでは5㎜を越えるものもある。丸底の直口壺6は、南東コーナー付近で出土している。器高14.1cm、口径11.3cm、胴部最大径13.7cm、偏球形の胴部に、外上方に直線的に立ち上がる比較的長い口頸部を持つ。

頸部の中位は若干外方に膨らみ、口端部は僅かに外反する。器表面はかなり摩滅しているが、胴下半部、頸部の外面に刷毛目を観察することができる。胎土は精良である。

高坏（２～４）　２は住居址南西部、３・４は北東部出土であるが、そのうち３は壺１、甕５とともに北東コーナー部に集中して出土した。２は器高14.0cm、坏部径16.2cm、脚裾径11.5cmを測る。坏部は外面に明確な稜を持って屈曲する。円錐形の脚柱部はその中位で僅かに外方に膨らみ、裾部は稜を持ってひろがっている。坏部屈曲部付近の内外面には、接合時の指頭痕が僅かに残っている。脚柱部の内面上位には削りの痕跡を残すが、その他の部位は内外面ともに撫でられており、磨きはみられない。３は器高13.0cm、坏部径17.2cm、脚裾径12.4cmを測る。２に比べて坏屈曲部の稜はあまく、脚裾部も内面には稜を持つものの、柱部と裾部の区画は明瞭ではなく、ラッパ状に開いた脚形態をなす。坏底部の突起を脚柱に挿入して接合している。焼成はあまく、器表面の損傷が著しい。４は前二者とは異なり、屈曲を

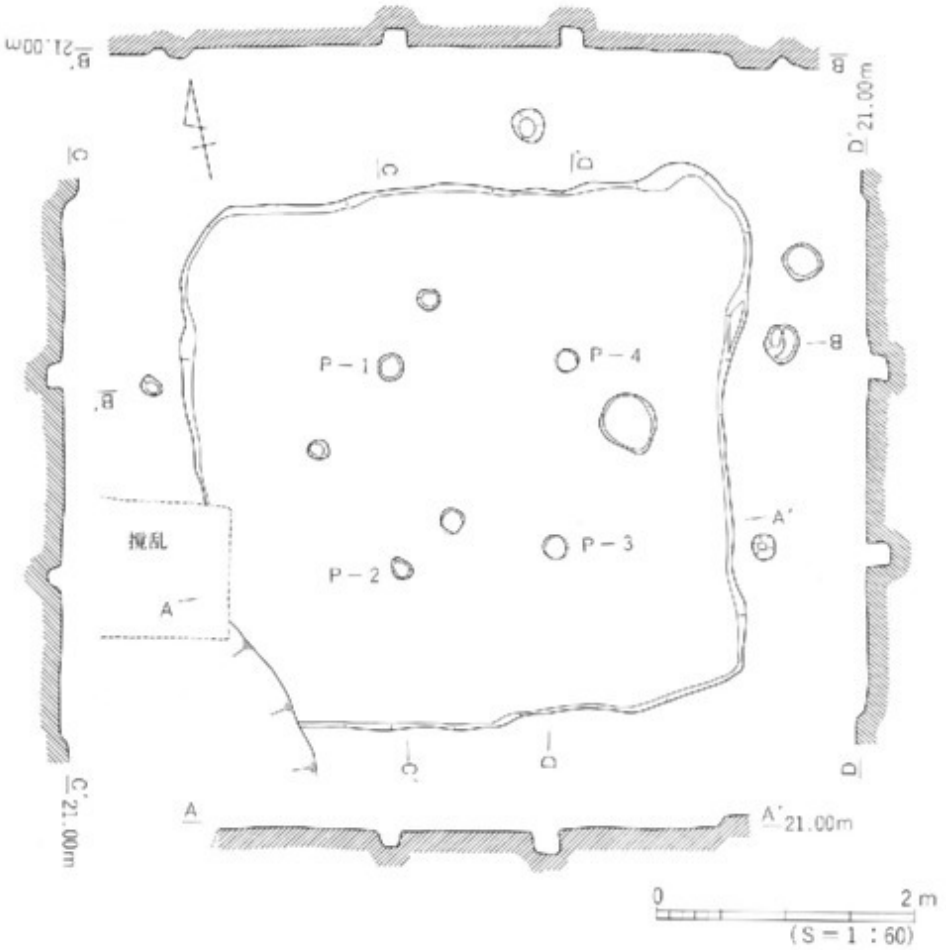


図３　竪穴住居ＳＢ－１

持たない浅い椀状の坏部に、ラッパ状に開いた脚部を持つものである。器高12.8cm、坏部径15.5cm、脚裾径11.1cmを測る。脚柱部下位には直径1.0cmの円孔を3方向に穿たれている。坏部との接合は脚柱挿入による。坏部は内外面ともに横撫で、脚部は柱部の外面を縦ヘラ磨き、裾部の内外面は横撫で、柱部の内面にはヘラ削りの痕跡が認められる。

甕（5）　二重口縁状に鈍く屈曲した口頸部を持つ丸底の甕、器高18.0cm、口径13.2cm、

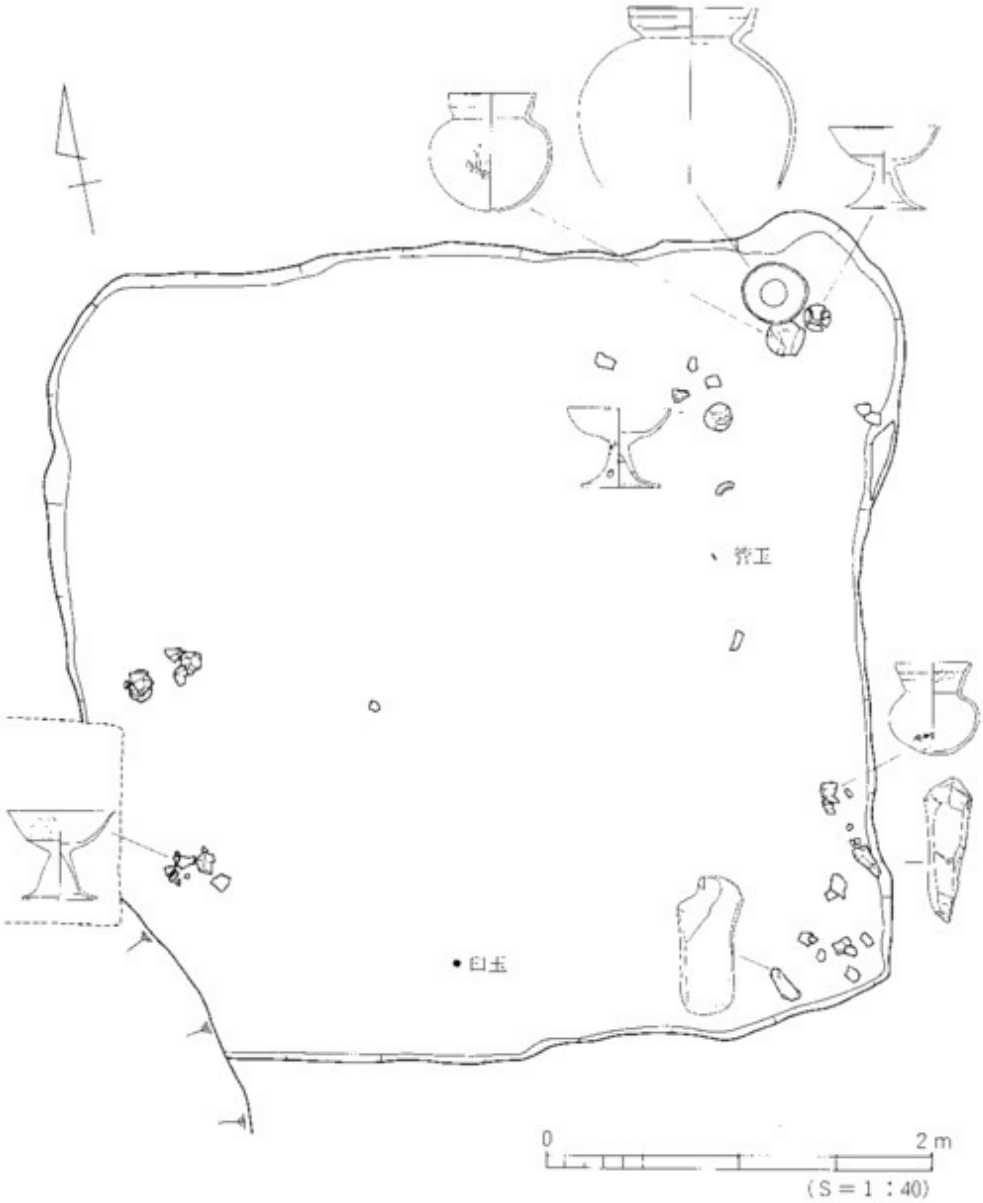


図4　SB－I遺物出土状況

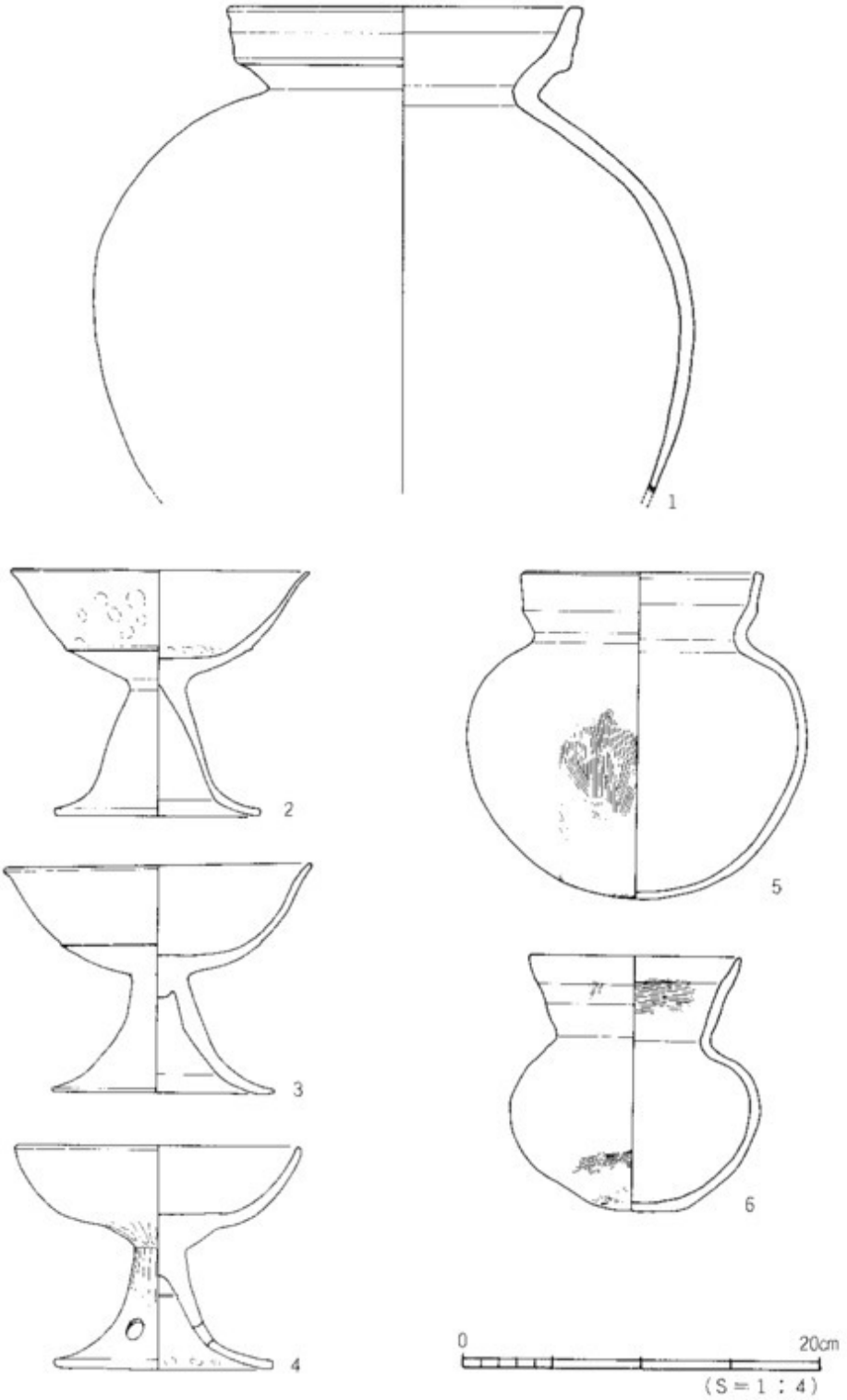


図5　ＳＢ－Ⅰ出土遺物(Ⅰ)

胴部最大径18.7cmを測る。球形に近い胴部は、その最大径を若干上位に持ち、器壁は非常に薄く削られている。頸部から口縁部への屈曲は、内外面に鈍い稜をなし、口端部は面取りされている。器壁の損傷が激しく胴部外面の一部に刷毛目、口頸部の外面に横撫でが観察できるのみである。

石製品（図６）

砥石（７・８）　２点の砥石が住居址南東隅部で出土した。７は方柱状の細粒砂岩の３面を砥面として用いている。一部を欠損しているが、現況で重量2,184ｇを量る。８はアプライト製、１面のみを用いており、重量1,076ｇを量る。

玉（図７）

管玉（９）　住居址東部寄り床面で出土した破損品で、淡緑色の碧玉製、直径0.45cm、残存長2.4cmを測る。穿孔は両端から行われている。

白玉（10）　住居址南部床面からの出土、暗い鶯色の滑石製、直径0.4cm、長さ0.29cmを測る。

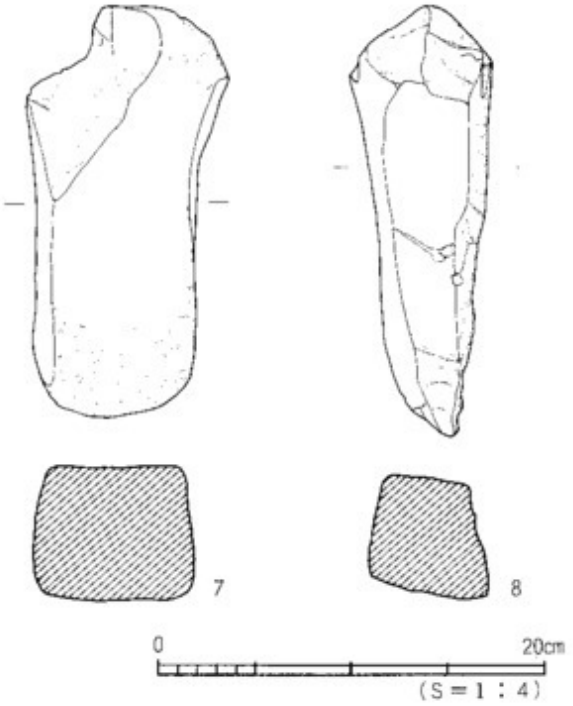


図６　ＳＢ－１出土遺物(2)

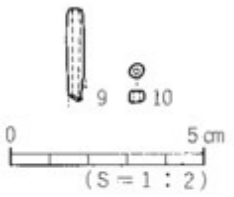


図７　ＳＢ－１出土遺物(3)

３．平安時代

溝ＳＤ－１（図８）

調査区東部で検出された南北溝で、古墳時代の住居址ＳＢ－１の南西コーナー部を切って

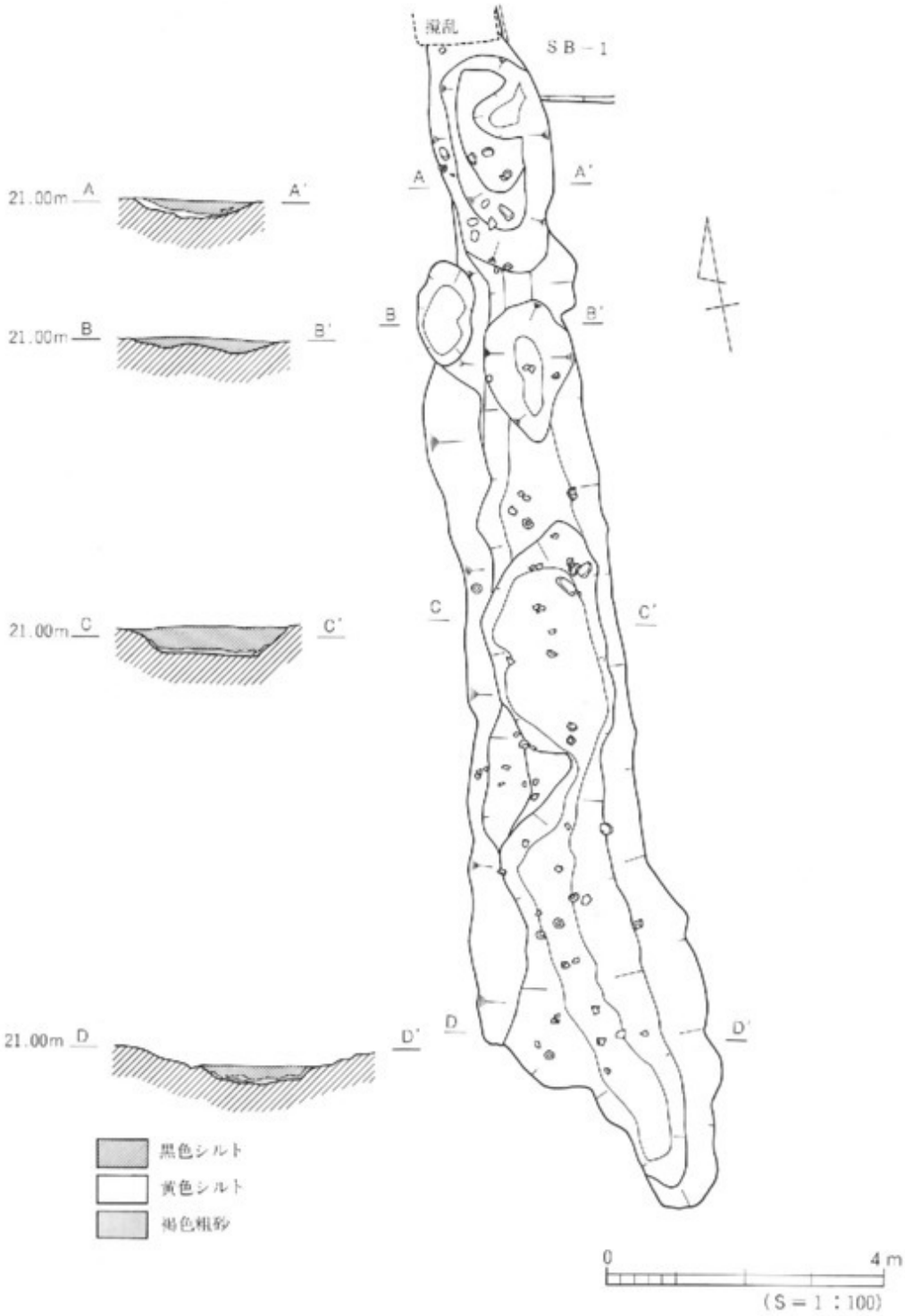

撹乱
SB－1
21.00m A
A'
21.00m B
B'
21.00m C
C'
21.00m D
D'
黒色シルト
黄色シルト
褐色粗砂
0
4m
(S＝1：100)

図8　SD－1平・断面図

いる。長さ17m、幅3.2～1.8m、深さは最深部で0.5mを測る。その南端、北端ともに調査区内で収束し、溝底は凹凸を持っている。溝底には部分的に粗砂が薄く堆積し、その上層を黒色シルトが覆っているが、ところによっては、崩落した溝壁の黄色シルトが黒色シルト内にブロック状に混入する部分がある。溝底や黒色シルト内より土師器杯、須恵器とともに緑釉陶器、灰釉陶器、管状土錘などを出土しており、投棄されたものと思われる。また、図化不能な青磁の小破片が数点出土している。これらの遺物より、9世紀末から10世紀前半代の遺構と考えられる。

ＳＤ－１出土遺物（図９～16）

土師器・黒色土器（図９～12）

坏（11～68）　底部ヘラ切りによる回転台成形の土師器坏が多く出土しているが、図化に耐え得るものは図示した48点である。法量は、概ね器高3.5～５cm、口径12～14cm、底径6.5～8.5cmの範囲に収まる値を示している。焼成は比較的良好で、橙褐色の色調を呈するものが多い。

器型は細かくみれば、７とおりに分類できる。突出しない平底、もしくは若干の凸面をなす底部から一貫して内湾気味に開くもの、Ａ類（11～21）。このＡ類の体部外面には、ヘラ削りや横撫でなどの二次的な器面調整は行われず、成形時の横撫で痕が残るのが特徴である。Ｂ類（22～48）は、Ａ類と同様の底部形態をなし、外反する口縁部を持つが、底部立ち上がり周縁部を回転ヘラ削りされるため、体部に稜を持つことが特徴である。Ｃ類（49～59）は、

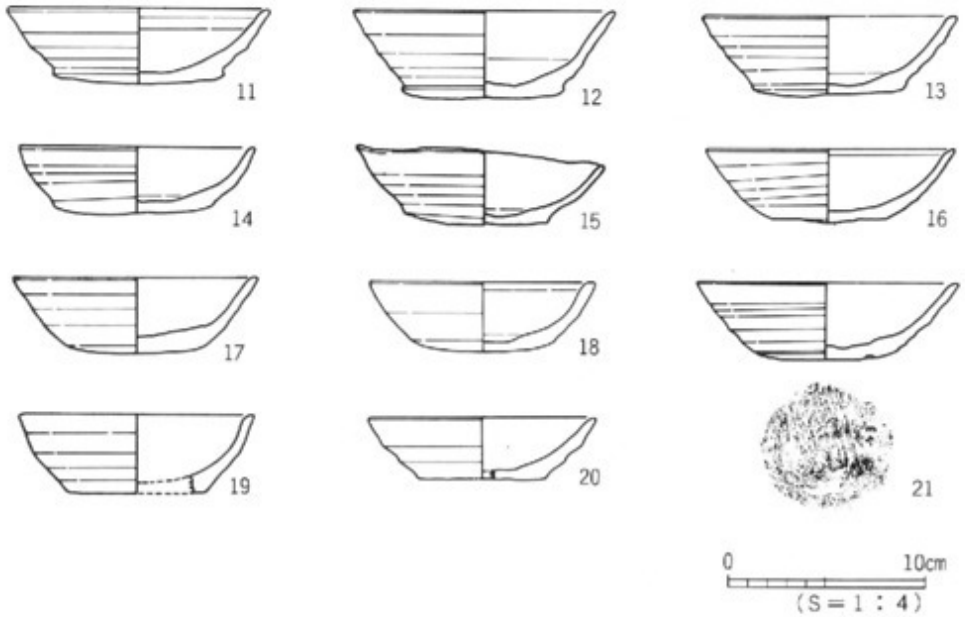


図９　ＳＤ－１出土遺物(1)

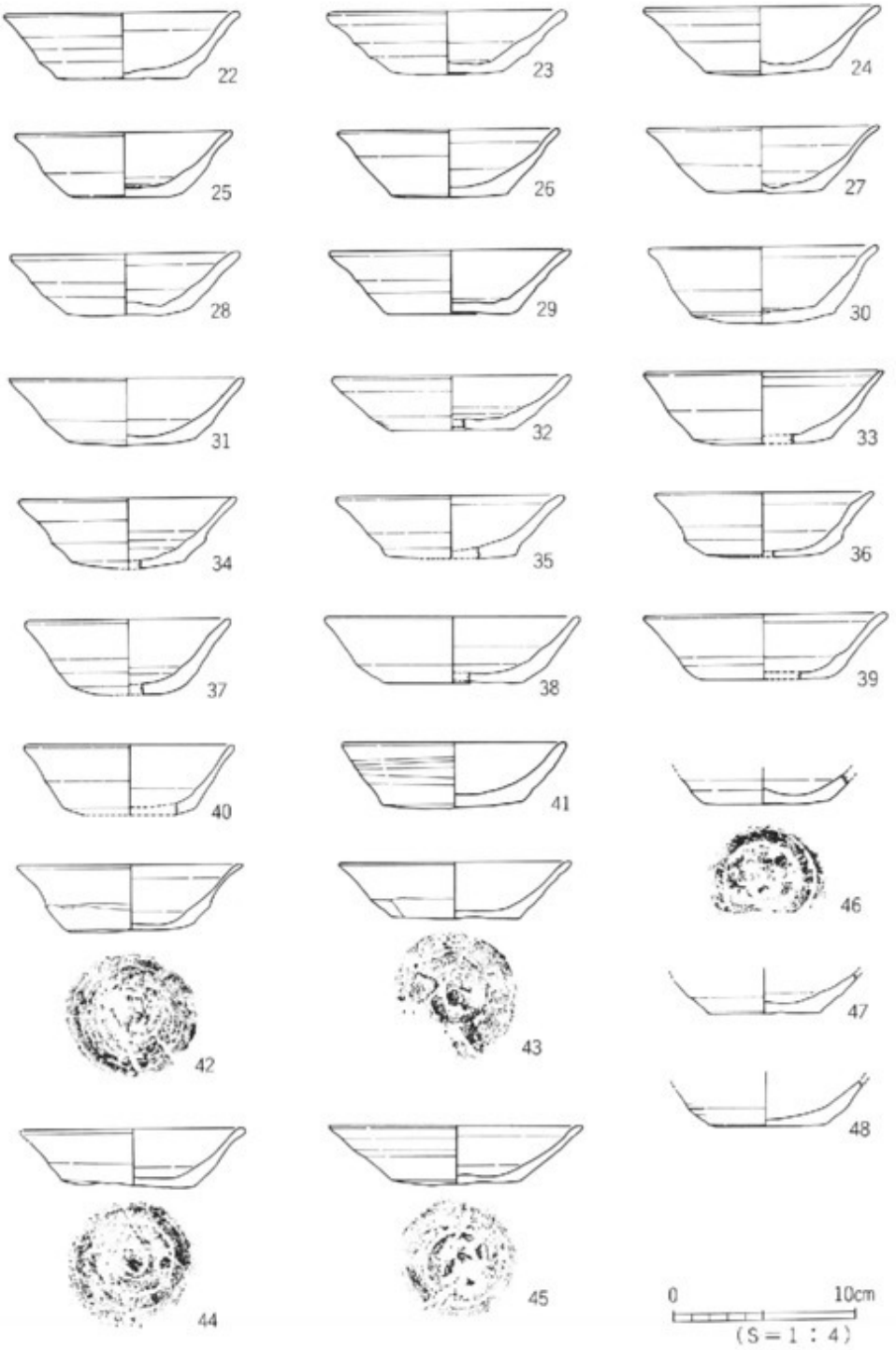


図10　ＳＤ－Ｉ出土遺物(2)

円盤状に突出した平底からやや内湾気味に開くもので、体部外面は横撫でされる。51のように成形時の横撫で痕が観察できるものにも二次的な器面調整としての横撫では行われている。D類（60～65）はC類に似るが、円盤高台ともいうべき突出した平底を持つC類に比べると、底部と体部の区画があまく、平底の底部から外反気味に開くものである。C類にみられるよ

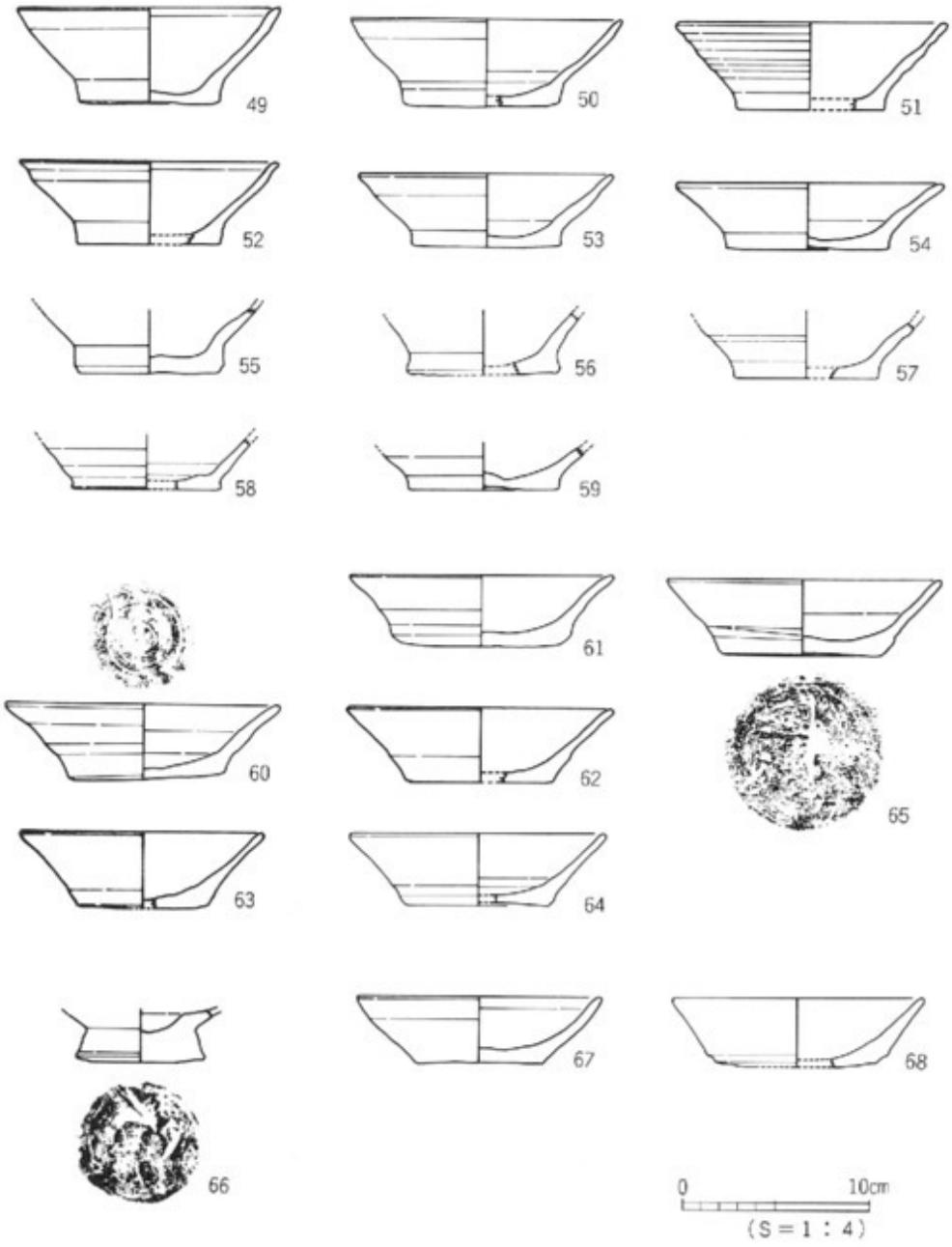


図11　SD－1出土遺物(3)

うな底部の突出が極端になったＥ類66のような底部も１点出土している。その他、これら５分類のいずれにも属さないＦ類67やＧ類68のようなものもある。67はＡ類とＤ類の折衷のような器型をなし、体部外面を横撫でされている。

回転台からの切り離しは、切り離し痕跡が観察できるもののすべてがヘラ切りによっている。切り離し後軽い撫で調整を行われるものや、板目状圧痕を持つもの、また21にみられるように縦方向に掻き取ったような擦痕を持つものもある。底部内面には回転撫でによる凹凸がみられるが、Ｃ類62の内底面にはこれらの凹凸とは異なる、比較的シャープな凹凸が螺旋状に巡っている。

皿（69）　器高2.0cm、口径12.0cm、底径7.4cmを測る土師器皿である。ヘラ切りの底部立ち上がり周縁部分をヘラ削りした後撫でるため、体部に鈍い稜を持つ。

椀（70）　内面のみに黒色処理を施された、黒色土器Ａ類椀である。復元口径15.0cm、高台径7.1cm、器高5.3cmを測る。あまり強く内湾しない体部に、高さ４mmと低い断面三角形の高台を貼り付けられ、坏型に近い器型をなしている。口端部を尖り気味に丸く収め、内面の端部を僅かに下った位置に１条の沈線が巡る。黒色処理された内面には横方向の緻密なヘラ磨きが行われ、さらに「ℓ」字状の暗文を施している。乳白色を呈する外面の口縁部は横撫でされるが、体部には雑で軽い撫でが施されるのみで若干の凹凸がみられる。

土釜（71）　外面口縁部直下に鍔を巡らせる土釜の口縁部片、復元口径19cmを前後する値になる。内外面ともに撫で調整される。口縁部内面と口縁部とを摘むように横撫でするため、口端部が内方に僅かに肥厚している。

須恵器（図13）

ＳＤ－１からは前述の土師器類とともに若干の須恵器を出土している。これらの須恵器の

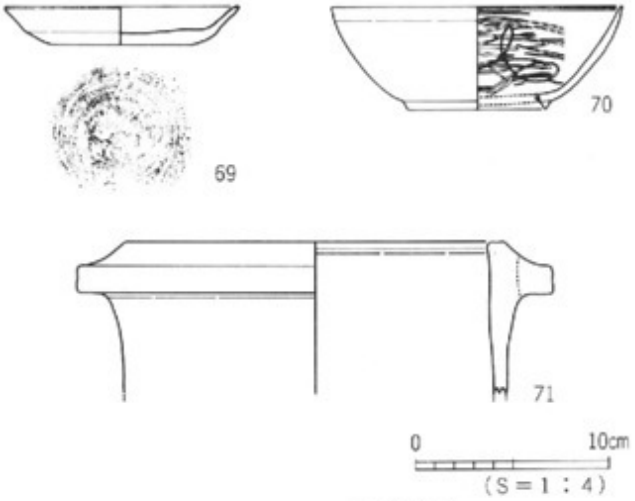


図12　ＳＤ－１出土遺物(4)

うち広口壺80や甕81という大型の器種の焼成は堅緻で、色調も青灰色のいかにも須恵器という焼成であるが、その他の坏や椀といった小型の器種は、乳白色または淡灰色の色調をなす比較的軟質な焼成によるものである。

坏（72～76）　口径13cm、器高3.5cm前後を測る72～74と、これらよりひとまわり大きく、口径15.5cm、器高5cm内外の75・76とがある。いずれも轆轤からの切り離しはヘラ切りによっており、二次的な調整は行われていない。後者の体部外面には轆轤目が残るが、前者の外面は撫で消されている。

椀（77・78）　内湾気味に開いた体部から僅かに口縁部が外反するものを椀として扱って

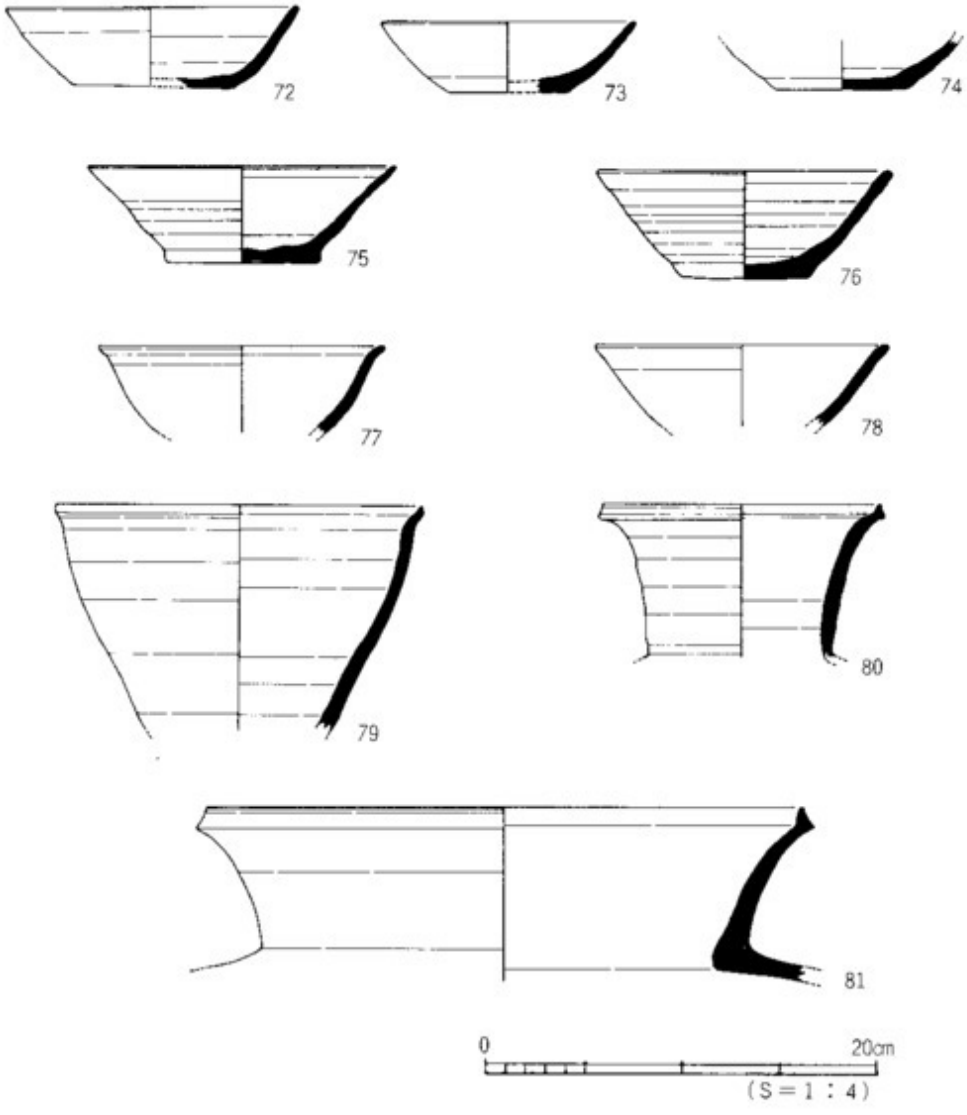


図13　ＳＤ－Ⅰ出土遺物(5)

いる。口径15cm前後、坏類に比べると内外面の撫では、さらに入念に行われており、体部の破片のみによっても坏類との識別は可能である。底部は坏と同様、円盤状の平高台になるものと思われる。

鉢（79）　復元口径18.8cm、底部からの立ち上がり部分で破損しており、器高は推定12cm前後の値になるものと思われる。緩く「S」字状に湾曲した体部から短い口縁部が緩く外反する。口端部は内外面を摘むように横撫でされ、外面に平坦な面を持つ。椀と同様、内外面ともに入念な横撫でを施されている。

広口壺（80）　口径14.4cm、残存高7.8cmの口頸部片である。口端部の内外面を摘んで横撫でされ、端部は断面三角形状の立ち上がりのようになっている。口端部外面は僅かな凹面をなしている。

甕（81）　復元口径34cm、残存高9.8cmを測る口頸部片で、口端部は広口壺79と同様の処理を施されている。残存部分の調整はすべて横撫でによっており、叩き目はみられない。

緑釉陶器・灰釉陶器（図14）

緑釉陶器　皿（82・83）　両者ともに素地は青灰色を呈する硬質の焼成で、釉薬は暗緑色に発色しており、同一個体の可能性もある。82は推定口径19.4cmを測る。直線的に外上方に開き、口端部に至って僅かに外反し、端部を丸く収めている。83は段皿の底部片、復原高台径9.1cmを測る。高さ0.7cm、断面方形の高台は貼り付けによっており、端面は僅かな凹面をなしている。内面見込み部には1条の沈線が円形に巡っている。皿底部の外面は入念に撫でられ、切り離し痕は観察できない。釉薬は全面にかかっているが、内面では銀化がかなり進行している。

緑釉陶器　耳皿（84）　約1/4を欠失した個体で、前2点の皿とは異なり、素地は淡黄色の土師質の焼成で、釉薬は淡黄緑色に発色する。口径10.2cm、底径4.4cmを測る皿の口縁部の対向する2箇所を折り曲げて器高3.3cmの耳皿としている。底部は低く突出した円盤状の平底で、切り離しは回転糸切りによっている。施釉は、底部の周縁を指先で摘んで、倒立された状態で釉薬に浸して行われていることが底部周縁の釉に残された指頭痕でわかる。外底面への施釉はなされていない。

灰釉陶器　皿（85）　口縁部の一部を欠失するが、ほぼ完形に近い1点である。器高2.8cm、口径13.3cmを測る。径8.4cmの高台は削り出しによると思われる。精良な胎土は明るい青灰色を呈し、口縁部周縁の内外面に施された釉は、黄味を帯びた灰色をなしている。体部外面には回転ヘラ削りの痕が残るが、内面は撫でられている。見込み部分の撫では、口縁部に比べて雑である。また、この見込み部分には重ね焼きの痕跡が観察できる。施釉は、浸しがけで行われているが、緑釉耳皿のように倒立した状態で行われたものではなく、器体を90度回転させて口縁部が直立した状態で釉薬に浸し、器体中心部を軸に回転させながら行われている。

土製品（図15）

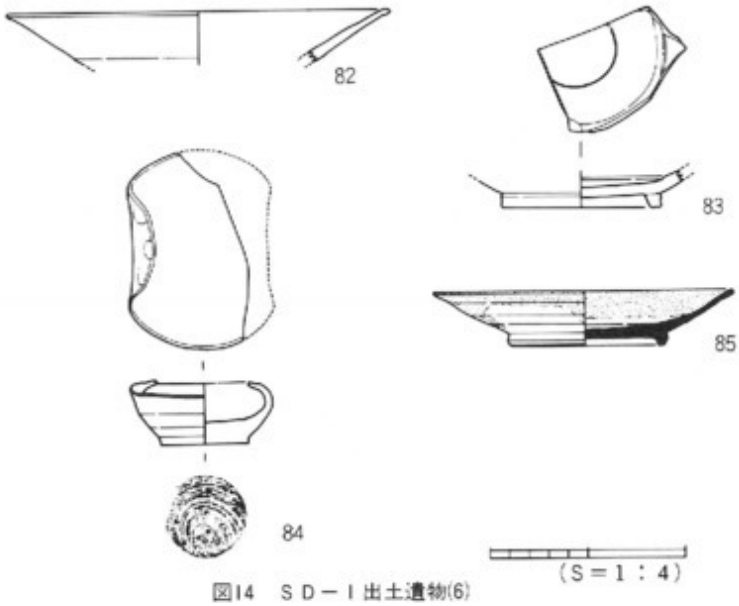


図14　ＳＤ－Ｉ出土遺物(6)

土錘（86・87）　管状土錘の完形品86と、半截品87の２点が出土している。直径3.5㎜前後の棒状の軸に薄い粘土板を巻きつけて成形したものと思われる。完形品86で全長4.2㎝、最大径９㎜、重量3.3ｇを測る。

石製品（図16）

砥石（88）　平面長楕円形、断面が隅丸方形に近いアプライトの転石を砥石として用いている。砥面として使用されているのは１面のみである。

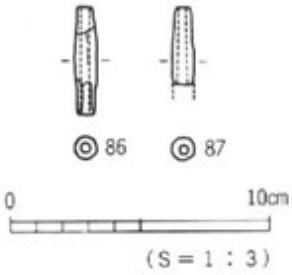


図15　ＳＤ－Ｉ出土遺物(7)

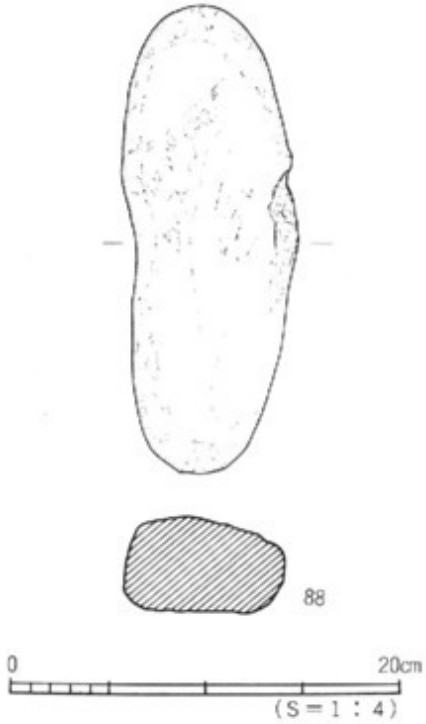


図16　ＳＤ－Ｉ出土遺物(8)

ＳＫ－１（図17）

調査地のほぼ中央部で検出された、1.2×1.4ｍの隅丸方形に近い形状をなす土壙で、北東隅部で柱穴Ｐ－63と切りあっている。壙底の北辺に接した部分を１×0.6ｍの楕円形状に深さ10～15cm程度さらに掘り窪めている。テラス状に掘り残された壙底に密着して図化不能な須恵器甕片、黒色土器Ａ類椀小片とほぼ完形に近い土師器坏１点を出土している。

ＳＫ－１出土遺物（図18）

坏（89）　器高４cm、口径14cm、底径8.1cmを測る回転台成形の坏で、切り離しは回転糸切りによっている。内外面に成形時の横撫での凹凸をそのまま残し、内面見込み部の一部には縦撫で痕がみられる。色調は乳白色を呈している。

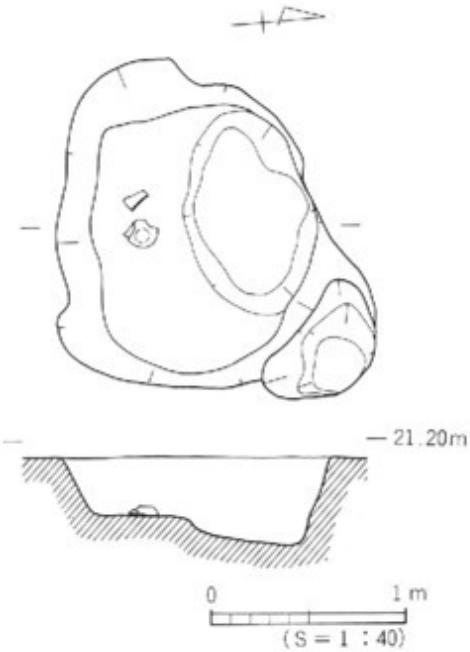


図17　土壙ＳＫ－１

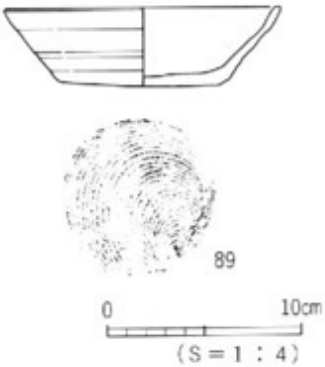


図18　ＳＫ－１出土遺物

４．中　世

調査で検出された遺構のうち、先述の古墳時代竪穴住居址ＳＢ－１、平安時代の溝ＳＤ－１を除いた柱穴や土壙は、調査地を薄く覆う第４層暗褐色粘質土により埋積しており、ほぼ同時期の遺構とみてよい。遺物を出土した遺構には、土壙ＳＫ－２、柱穴Ｐ－３・17があるが、柱穴にはその遺構としての性格上、遡る時期の遺物が含まれている。ＳＫ－２出土の遺物から判断して、これらの遺構は13世紀代の遺構群と考えられる。

土　壙

ＳＫ－２（図19）

調査地中央、西端部分で検出された長径1.45ｍ、短径0.8ｍを測る楕円形に近いプランをなす土壙で、深さ20cm程度の遺存である。この土壙自体には火熱を受けた様子はみられないが、出土した須恵器や土師器には二次的に火熱を被ったと考えられるものがある。

ＳＫ－２出土遺物（図20）

瓦器

椀（90）　和泉型瓦器椀の底部片と思われる。直径4.3cmを測る低い高台は、接地部に僅かな平坦面を有する逆台形状を呈する。内面見込み部には1.2cm程度の間隔で平行線状の細い暗文が施されている。外面には指頭圧痕がみられる。

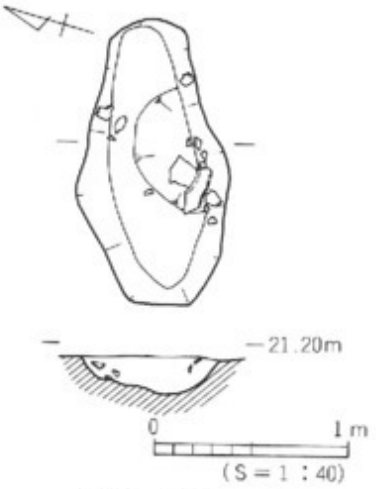


図19　土壙ＳＫ－２

土師器

椀（91・92）　91は瓦器椀の形態を模したものと考えられる１点であるが、二次的な火熱により赤変している部分もみられ、瓦器そのものが酸化した可能性もある。成形の各所、器壁の厚さや高台の貼り付けに稚拙な部分が看取され、いずれにしても搬入瓦器椀の形態を模したものであることにかわりはない。器高5.3cm、口径16cm、高台径5.7cmを測る。92は底部片、断面三角形の貼り付け高台は径6.2cmを測る。乳白色の色調を呈し、内面は磨かれている。

須恵器

甕（93）　復元口径29.8cmを測る口縁部から肩部の片で、接合はしないが同一個体の胴部片も出土している。91同様、この個体も二次的火熱を受けたものと考えられ、色調は明るい黄橙色を呈している。胴部から比較的緩く外反して外上方に開く短い口縁部を持つ。口端部

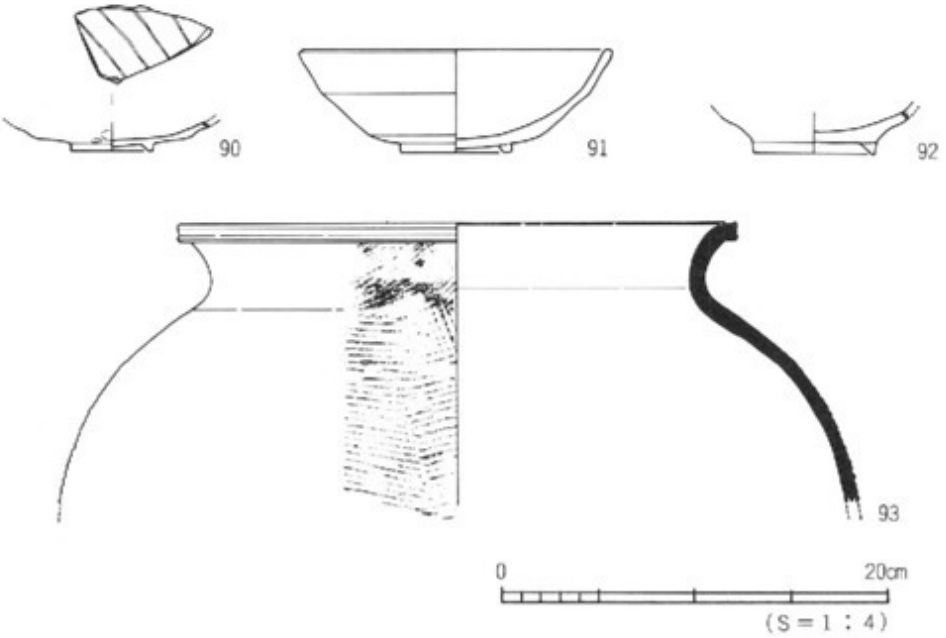


図20　ＳＫ－２出土遺物

はその上下端をそれぞれつまむようにして横撫でされるため、端面に明確な凹面を有する。したがって、端部の内外面にも凹部が形成されている。外面の胴部から口縁部にいたるまで、平行条線による叩き目が施される。口縁部の叩きは横撫でにより撫で消されているが、叩きそのものがしっかりしているため、その痕跡は明瞭に残っている。また、胴部の叩きは綾杉状に施されている。内面は、撫でられているが、接合しない胴部片には同心円状の叩き目と思われる痕跡が部分的に看取される。魚住窯の製品と考えられる。

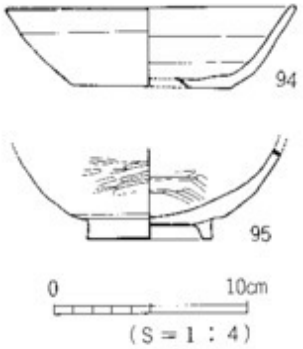


図21　柱穴出土遺物

柱穴出土遺物（図21）

坏（94）　P－3出土の底部回転糸切りによる土師器坏、器高3.1cm、口径14.8cm、底径8.1cmを測る。

椀（95）　P－17出土の黒色土器B類椀の底部片である。断面方形の比較的しっかりした貼り付け高台は径6.5cmを測る。観察できる範囲の内外面の磨きはさほど入念ではない。柱穴の埋土は、前述の土壙や、P－3をはじめとする他の柱穴と同様であり、この遺物が柱穴の時期を反映するものではなく、本来溝SD－1や、その時期に存在していたであろう遺構に関わる遺物と考えられる。

III 考　察

1．遺跡の評価

調査では、古墳時代中期、古代後期、中世の遺構・遺物が検出された。なかでも平安時代の溝状遺構ＳＤ－１出土の遺物群は比較的一括性が高く、またある程度の年代の目安ともなりうる搬入土器と在地の土器とが共伴している点で松山平野の古代以降の土器編年にとっては重要な遺跡といえよう。次節では、これらの遺物を軸に管見にふれた松山平野出土の古代後期から中世の土器について、未報告資料の資料紹介もかねて検討してみたい。

2．松山平野出土の古代後期から中世の土器

検討の方法としては、まず搬入土器との共伴により年代の基準となり得る資料をあげておき、次に型式学的な検討からこれらの間を埋めてゆくという方法をとるが、器種ごとの型式変化をたどれるだけの器種構成に恵まれた資料は皆無に等しく、土師器坏を中心にせざるを得ないことをことわっておく。

●石井幼稚園遺跡ＳＤ－１（図22）

在地の土器としては、土師器坏・皿・鍋がある。坏・皿はすべて回転台成形によるもので、底部の切り離しはヘラによっている。坏の形態は、大まかにみてＡ～Ｄ類の４とおりに分類できるが、その法量は口径12～14cm、器高3.5～５cmの値を示しており、概して円盤高台のＣ類が底部を突出させる分だけ器高が若干高くなる傾向があるが、全体的には法量に大きな差異はない。また、これらの坏はその器型を問わず、赤みを帯びた褐色に焼成されている点でも共通する特徴を有している。このような器型の差がどのようなことに起因するのかは不詳である。

このような在地の土師器と共伴して、若干の須恵器や搬入土器が出土している。搬入土器には東濃産灰釉皿85、緑釉皿・段皿82・83、京都洛西窯産緑釉耳皿84、畿内産黒色土器Ａ類椀70などがある。このうち、黒色土器Ａ類椀は坏型から椀型への変遷期の器型をなしており、ほぼ10世紀の前半期のものとみてよい。施釉陶器類には、この時期よりも若干遡るかと思われるものも含まれているが、ＳＤ－１全体の時期として考えた場合、この10世紀前半という時期におさめておくのが妥当であろう。

●筋違Ｇ遺跡ＳＰ－５（図23）

松山市福音寺町所在。1989年の調査で、堀立柱建物を構成する柱穴のうちの１基より、瓦器椀と土師器椀の２点が出土している。土師器椀97は口径15cm、器高5.7cmで底部には断面三角形の低い高台が貼り付けられる。瓦器椀96は和泉型で、尾上編年Ⅱ－２期に属するものと考えられる。暦年代を森島康雄氏の修正意見に従えば12世紀の前半代ということになる。

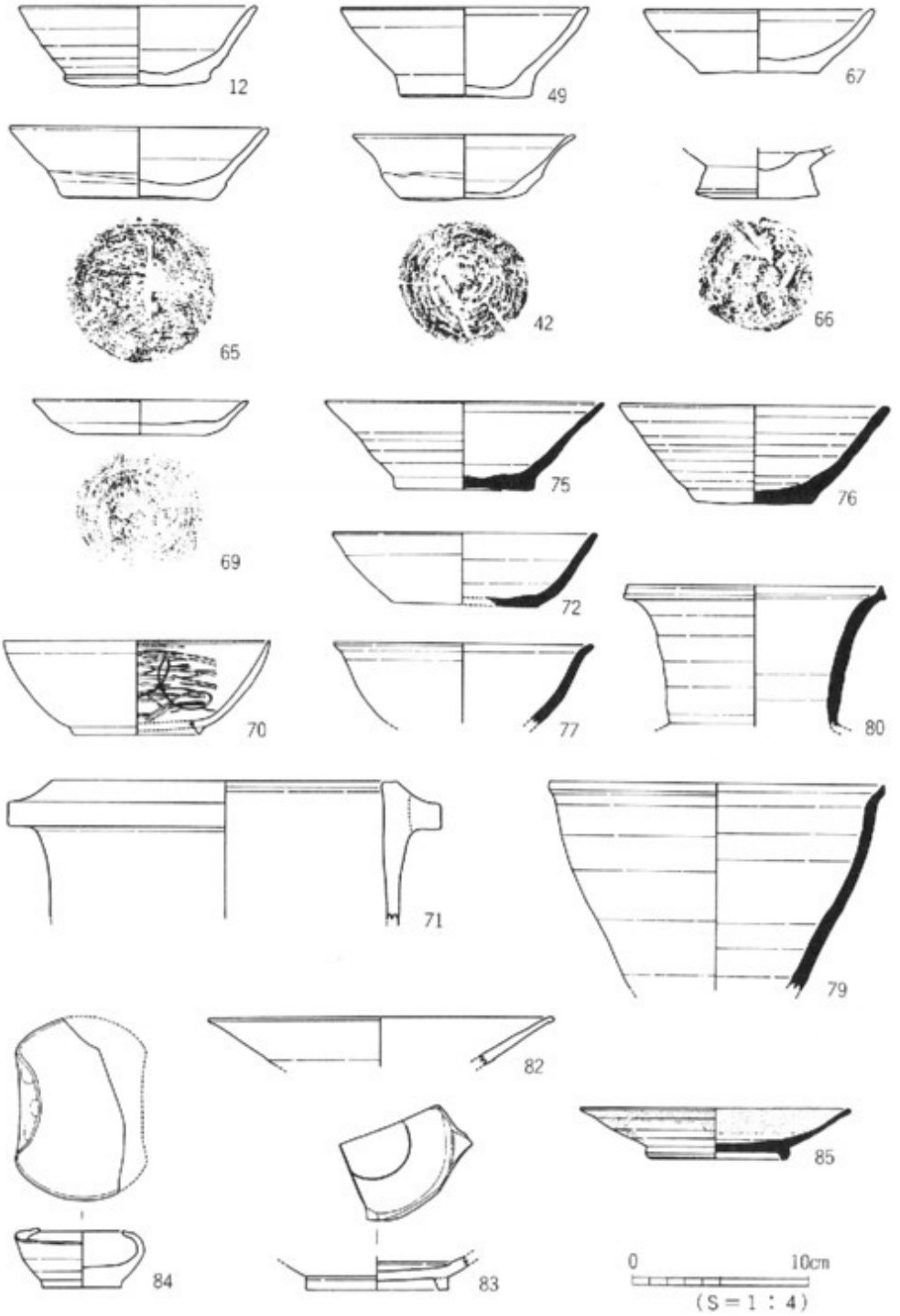


図22　石井幼稚園遺跡ＳＤ－Ⅰ出土遺物

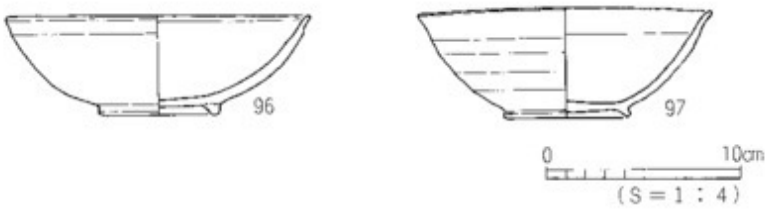


図23　筋違G遺跡ＳＰ－５出土遺物

●古照遺跡７次調査Ｂ区ＳＫ－９（図24）

松山市南江戸に所在する。1971年の１次調査で古墳時代前期の灌漑用井堰遺構が調査されて以来、断続的に調査が行われているが、1990年の６次調査以降は継続して調査が実施され、1994年現在10次までの調査が完了している。1991年の７次調査Ｂ区土壙ＳＫ－９より、良好な一括遺物の出土をみている。出土したものは瓦器椀、土師器坏・皿で、瓦器椀105は和泉型13世紀初頭に比定できるものである。土師器坏98～100は底部回転糸切りによる回転台成形、口径12.8cm～13.6cm、器高3.5cm前後を測る。皿には口径8.5cm、器高1.2cm程度の小型で、底部糸切り回転台成形のもの103・104と、手捏ねによる成形で口径13cm、器高2.8cm程度の101・102のようなものとの２種類がある。回転台成形の坏・皿の底部には板目状圧痕がみられる。

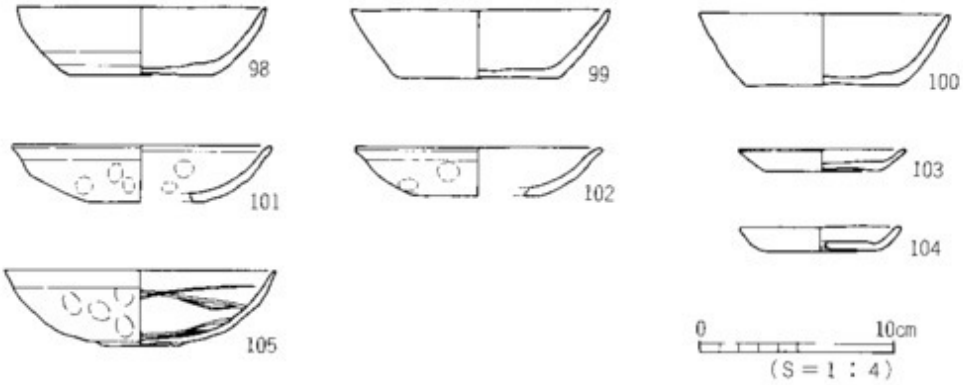


図24　古照遺跡７次調査Ｂ区ＳＫ－９出土遺物

●古照遺跡８次調査ＳＫ－１（図25）

1992年～1993年にかけて行われた調査で、土壙墓から13世紀前半代の和泉型瓦器椀、湖州六花鏡とともに在地土器として貼り付け高台を持つ土師器椀が出土している。

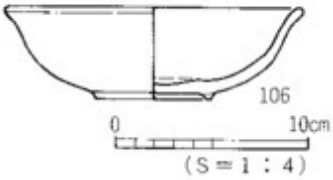


図25　古照遺跡８次調査ＳＫ－１出土遺物

●石井幼稚園遺跡ＳＫ－２（図26）

魚住窯産の須恵器甕93、和泉型瓦器椀90と在地の瓦器椀91・土師器椀92とが共伴して出土している。このうち須恵器甕は、その口端部を上下方に僅かに摘み出す12世紀後半期の特徴を有するが、瓦器椀はこれより若干下って13世紀前半代のものであり、遺構の時期としてはこの瓦器椀の時期をとる。在地の瓦器・土師器椀ともに回転糸切りによって切り離された底部に輪高台を貼りつけている。土師器椀の内面は横方向に磨かれるが、瓦器に磨きはみられない。二次的な火熱により酸化されたか、或いは焼成の際の炭素吸着が充分に行われなかったため、土師器に近い焼成となっている。

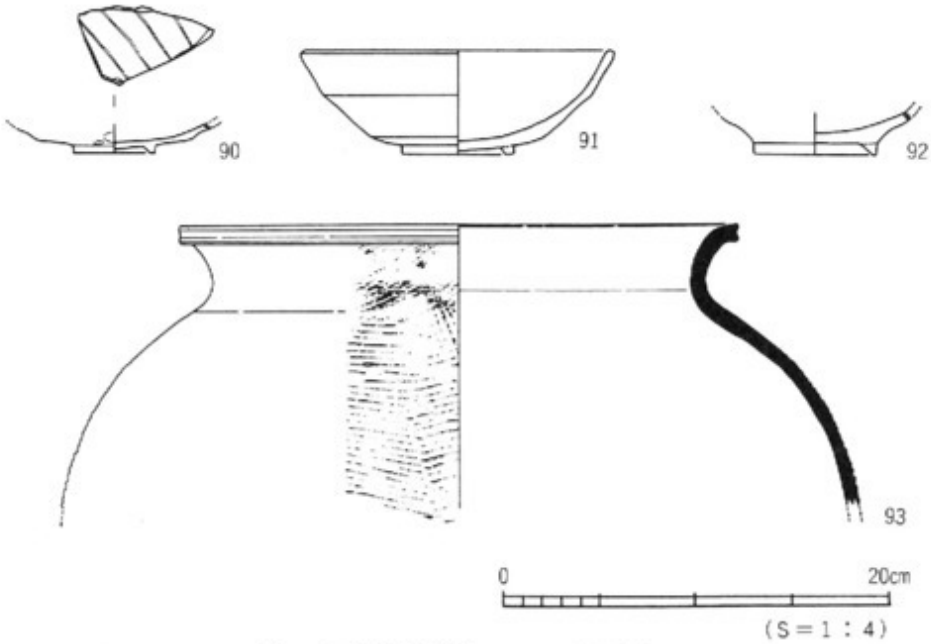


図26　石井幼稚園遺跡ＳＫ－２出土遺物

●南江戸闇目遺跡土器集積遺構（図27）

古照遺跡の北方150ｍにあり、1992年の調査によって３基の土器集積遺構が検出されており、そのいずれもから多量の土師器を出土している。底部回転糸切りによる多量の土師器坏と共伴して吉備系土師器椀114が出土した。この搬入土器から13世紀後半の遺構と考えられる。

●久米窪田古屋敷遺跡Ａ区ＳＤ－３（図28）

松山市久米窪田町に所在する。調査は1987年に行われ、弥生時代の土壙・溝や奈良時代の掘立柱建物のほかに、中世の溝が検出されている。底部糸切りの土師器坏とともに東播系の片口鉢119が出土した。この片口鉢は魚住窯の製品、このてのものとしては最終段階のもので14世紀の中頃のものと考えられる。

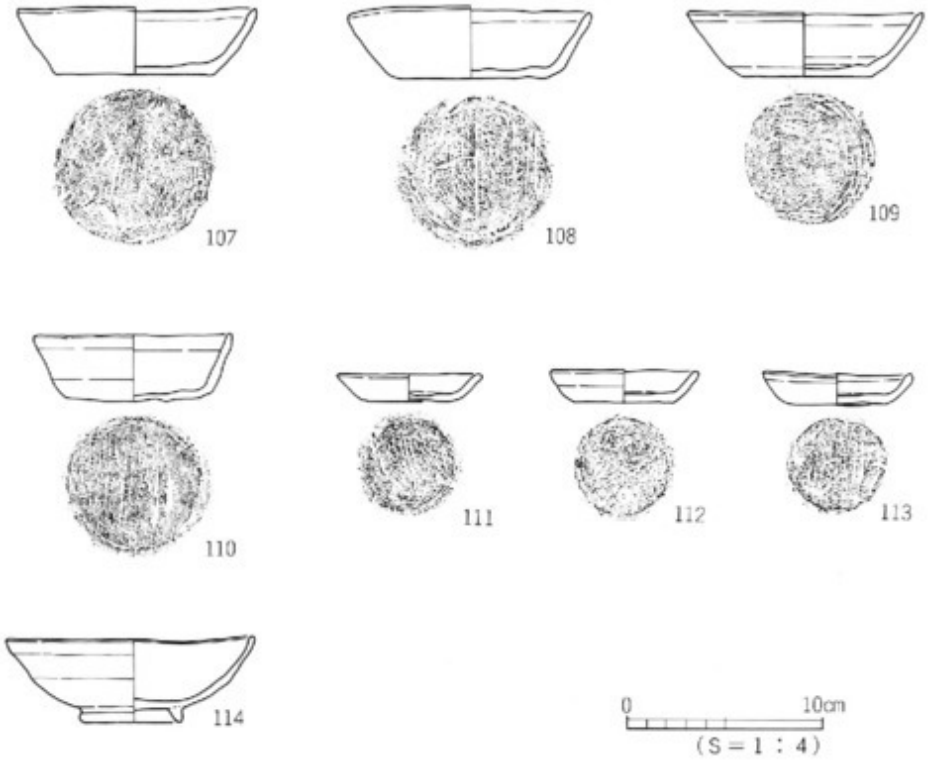


図27　南江戸藍目遺跡土器集積遺構出土遺物

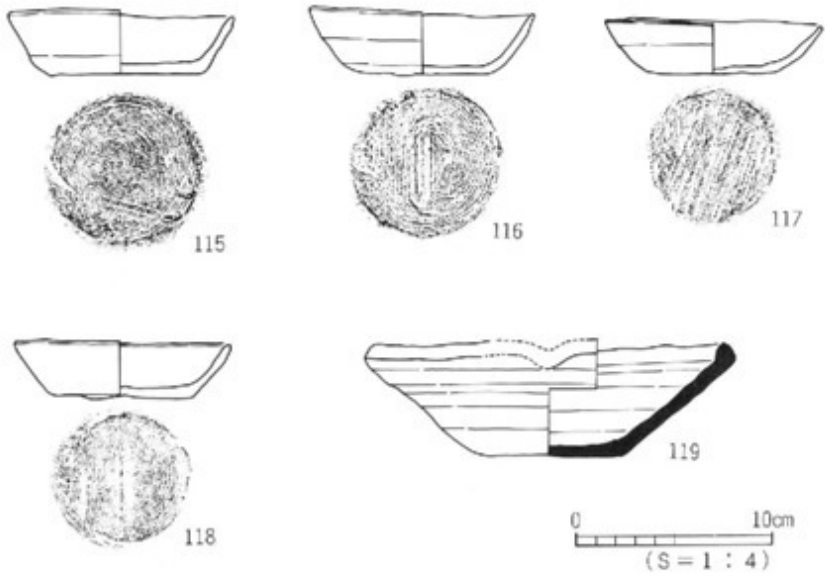


図28　久米窪田古屋敷遺跡Ａ区ＳＤ－３出土遺物

以上が、搬入遺物により一応の年代を推定できる資料である。これらの資料の間を埋める、或いは補完するものとして、以下の資料を挙げておく。

●久米小学校構内遺跡２次調査（図29）

1983年、久米小学校校舎改築に伴う調査で、旧運動場の南端部と構内の西端部にあたる駐車場の２箇所の調査が行われた。駐車場では小溝、小柱穴が検出されたが、図示した２点の土師器は直径20cm程度の浅い堀込みの中で、蓋と身のように重なった状態で出土したものである。両者ともに石井幼稚園遺跡ＳＤ－１の土師器坏と同様の製作技法によっており、その法量はひとまわり大きい。120は底部立ち上がりの部分に回転ヘラ削りを施し、体部の下半に稜を持つＢ類と同様の器型、121は高台を除けば体部外面に成形時の横撫で痕を残すＡ類坏の器型になる。成形や各部の調整は、石井幼稚園例に比べると丁寧でシャープさを持っており、サイズもひとまわり大きいことから、10世紀前半の石井幼稚園例よりも遡る可能性がある。

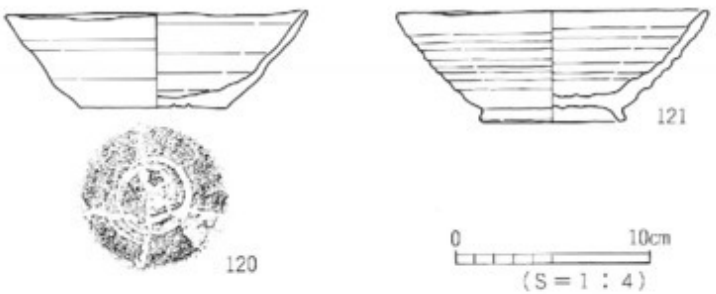


図29　久米小学校構内遺跡２次調査出土遺物

●久米窪田森元遺跡ＳＤ－４（図30）

松山市久米窪田町所在、前述の古屋敷遺跡の西方200ｍの位置にあたる。1987年の調査で、縄文時代後期の土壙や古代の溝状遺構が検出された。この溝状遺構ＳＤ－４の出土遺物には、あきらかに古墳時代まで遡る何点かの遺物が混入しているが、概ね良好な一括遺物として扱えるものである。遺物は回転台成形の土師器坏がその主たるもので、若干の須恵器を含んでいる。底部ヘラ切りによる土師器坏は、その製作技法、器型のバリエーションともに石井幼稚園遺跡ＳＤ－１のものに酷似しているが、122・123のように口径12cm前後とひとまわり小さくなるものも存在する。遺構としては、石井幼稚園ＳＤ－１に続く時期10世紀後半頃を想定しておくが、122・123以外の遺物が単独で出土した場合には判別がつかない。

●鷹ノ子遺跡１次調査ＳＫ－３（図31）

1989年の調査で古代・中世の遺構・遺物が検出されている。これらの遺構のうち、180×70～80cmの長方形プランをなすＳＫ－３は木棺墓と考えられ、この壙底から土師器坏・甕、八稜鏡、釘などを出土している。土師器坏133は底部ヘラ切りで、その口径は10.6cmと上述の森元遺跡の２点よりもさらに小さくなっており、法量の縮小化傾向を古から新への目安とす

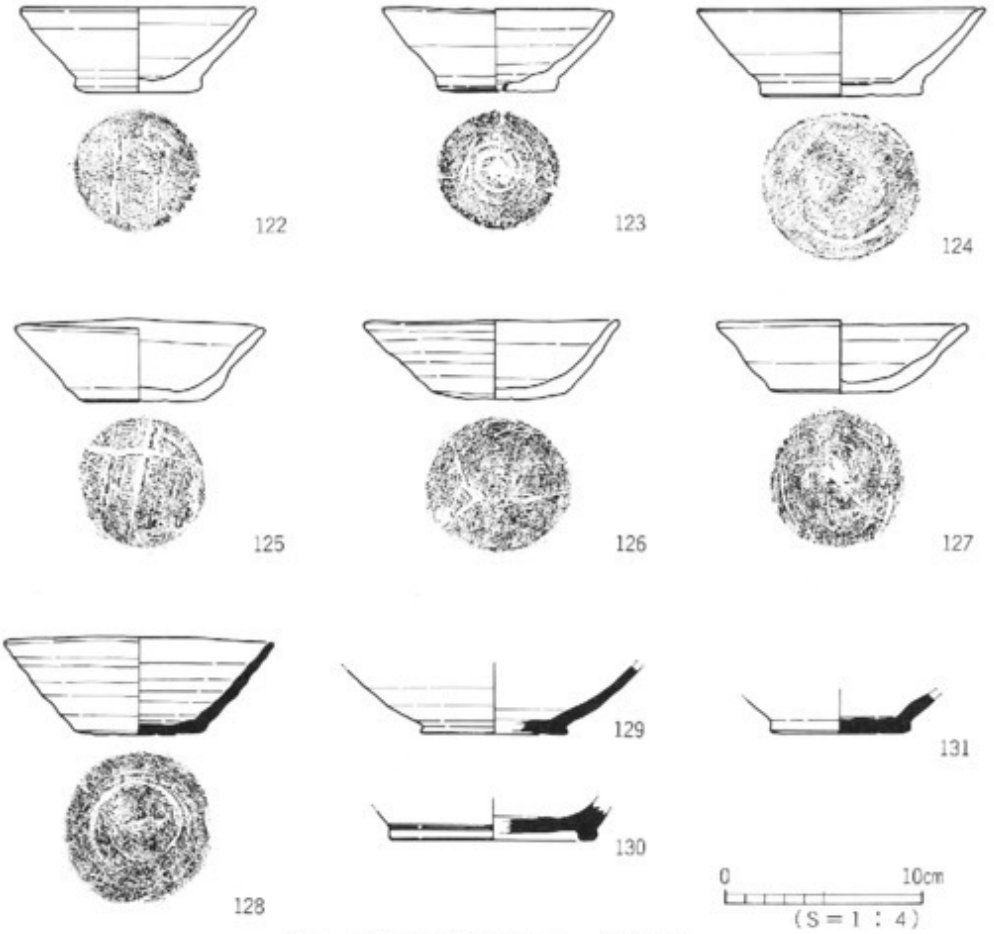


図30　久米窪田森元遺跡ＳＤ－４出土遺物

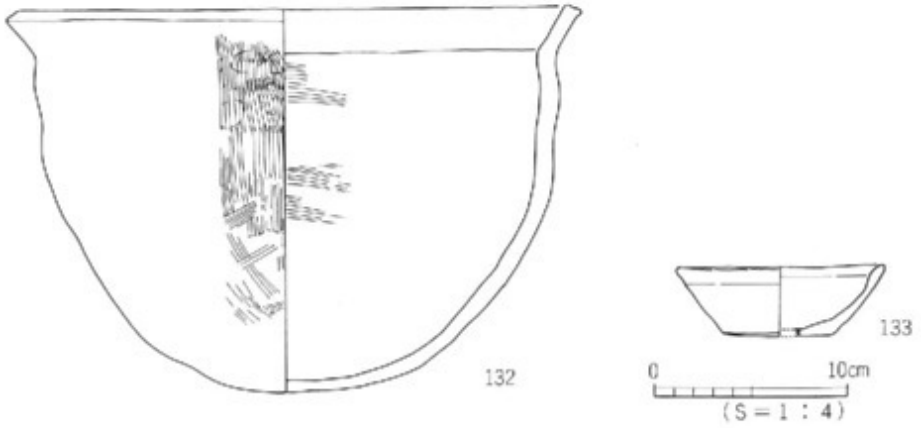


図31　鷹ノ子遺跡Ⅰ次調査ＳＫ－３出土遺物

るならば、10世紀後半を想定した森元遺跡よりもさらに新しい時期を考えなければならない。

●石井幼稚園遺跡ＳＫ－１（図32）

底部回転糸切りの回転台土師器坏89は、その器型・法量ともにＳＤ－１出土の坏Ａ類もしくはＤ類に近似している。おそらく、当平野における糸切り底を持つ坏の初現に近い時期のものと考えられる。

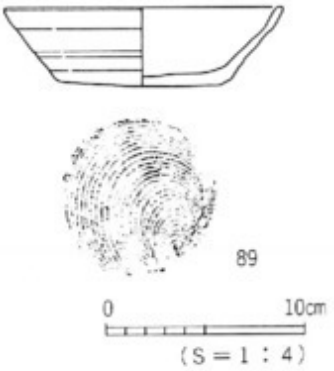


図32　石井幼稚園遺跡ＳＫ－１出土遺物

●拓南中学校構内遺跡ＳＫ－２（図33）

松山市枝松５丁目所在の松山市立拓南中学校構内における校舎建設に伴う調査が1984年に実施され、土壙墓とみられる長方形竪穴から回転台土師器坏がまとまって出土した。底部回転糸切り、口径12cm前後を計る。底部からの立ち上がり部分の角をとるように横撫でされている。法量的には13世紀後半に位置づけた南江戸閾目遺跡土器集積遺構と14世紀中頃の古屋敷遺跡Ａ区ＳＤ－３の同種の坏の中間にあり、この二者の間を埋める時期、14世紀前半頃のものと考えられる。

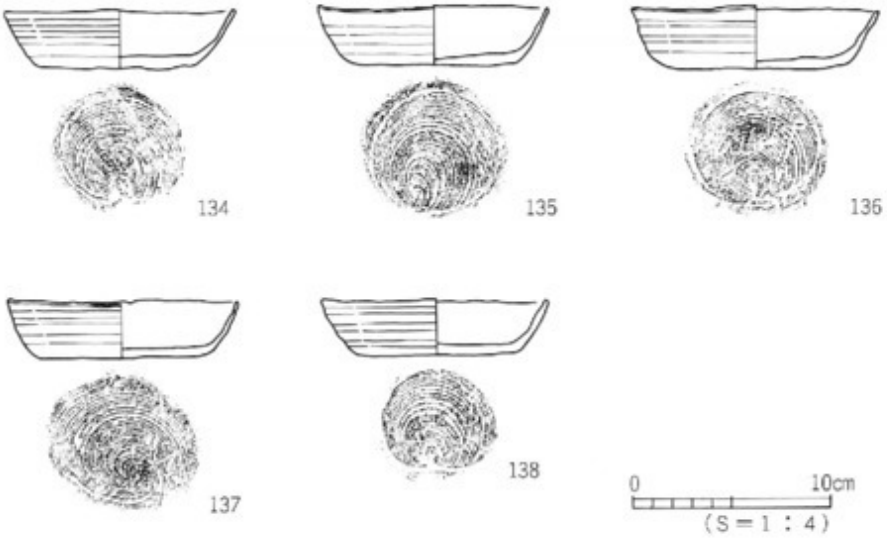


図33　拓南中学校構内遺跡ＳＫ－２出土遺物

以上の資料について簡単にまとめておくと、まず軸となる10世紀前半の石井幼稚園遺跡ＳＤ－１に先行して９世紀後半代に遡る可能性があるものとして久米小学校構内遺跡２次調査の２点の坏（図29－120・121）があり、続く10世紀後半の資料としては久米窪田森元遺跡ＳＤ－４の坏２点（図30－122・123）がある。鷹ノ子町遺跡１次調査ＳＫ－３の遺物（図31）については、久米窪田森元をさらに下ると考えられるもので、11世紀前半頃のものとしてお

く。これら4遺跡出土の回転台土師器坏の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものである。

石井幼稚園遺跡ＳＫ－１出土の坏（図32－89）は、切り離し技法を除けばその形態・法量、多段撫で技法ともに同遺跡ＳＤ－１の坏に近似しており、糸切り底を持つ坏の初現として考えた。ところで、石井幼稚園ＳＤ－１例以降、11世紀前半の鷹ノ子町遺跡ＳＫ－３の底部ヘラ切り坏まで法量の縮小化を根拠として相対的な前後を求めているが、こういった一元的な解釈だけで考えると、器型の小さくなったものに糸切り底が採用されなければならず、この坏が宙に浮いたものとなってしまう。瀬戸内の古代末、中世の土器をまとめた橋本久和氏は、ヘラ切りから糸切りへの移行がある時期以降全面的に行われるのではなく、両者の手法が混在する時期があることを指摘している。10世紀後半とした久米窪田森元遺跡ＳＤ－４出土のこの種の坏は、法量の小さいものを若干含んではいるが、依然形態・法量ともに石井幼稚園ＳＤ－１のものと区別がつきかねるものが多い。石井ＳＤ－１・森元ＳＤ－４の坏底部がすべてヘラ切りによっていることからこの時期までは上げ難いが、11世紀前半とした鷹ノ子ＳＫ－３のヘラ切り底を有する坏が僅かに１点のみの資料であり、必ずしも良好な資料とはいえないことを考えると、この石井幼稚園ＳＫ－１例を11世紀を前後する時期においてもさほど無理はないものと考える。当平野における古代末から中世の土器を論じた中野良一氏は、松環古照遺跡において11世紀代の黒色土器椀に伴う土師器坏がヘラ切りであるところから、在地の土師器坏・皿・椀類の底部切り離し技法のヘラ切りから糸切りへの転換期を11世紀後半から12世紀初頭の間に求めている。大きな画期としてのこの年代は動くまいが、さきの橋本氏の指摘にあるような切り離し技法の混在といった瀬戸内各地の現象にならう傾向が当平野では11世紀代を通じてあったものと考えたい。いずれにしても11～12世紀代の良好な共伴遺物を伴った回転台土師器坏の資料が手薄なことは否めず、資料の蓄積を待たなければ、切り離し技法転換の実態を明らかにすることは難しい。

上述のように11～12世紀代の回転台土師器坏の良好な出土例はほとんどないが、黒色土器・瓦器と土師器椀の共伴例は幾例かあって、既に報告されたり、資料紹介されているものもいくつかある。ここでは未報告の12世紀前半の筋違Ｇ遺跡ＳＰ－５の遺物を挙げておいた（図23）。

13世紀以降の瓦器や須恵器に伴う回転台土師器坏・皿の底部切り離し技法はすべて回転糸切りである。13世紀初頭の古照７次、13世紀前半の古照８次、石井幼稚園ＳＫ－２、13世紀後半の南江戸園目、14世紀前半の拓南中学校、14世紀中頃の久米窪田古屋敷と続く。道後平野における13～15世紀の資料を中心に中世土器を検討した宮本一夫氏は、これらの坏・皿類が、時間的経過によって口径を減じ、また体部の立ち上がりが急角度になるとしており、ここでも概ねこれを追認する結果となった。

10世紀前半から14世紀までの回転台土師器坏を中心に資料を紹介した。11～12世紀代の資料が貧弱で、充実したものとはいえず、特に底部切り離し技法の転換期の実態については課

題が残っている。近年、当地域においても古代・中世土器に関する資料の掘り起こしを含めた研究が着実に行われており、これらの資料がよりきめ細かな編年へのたたき台となれば幸いである。

資料を検討するにあたっては第Ⅰ章にご芳名を記した日本中世土器研究会を中心とした方々に貴重なご教示・助言を頂いた。あらためて感謝申し上げる次第である。

参考文献

上田　真　『南江戸遺跡』　松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

梅木謙一・宮内慎一　「鷹ノ子遺跡１次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

岡田敏彦　『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－松環古照遺跡－』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター　1993

尾上　実　「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』　1983

栗田正芳・河野史知　『古照遺跡－第７次調査－』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1993

栗田正芳・河野史知　「古照遺跡８次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

中野良一　「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』　1988

橋本久和　「瀬戸内の中世土器」『中世土器研究序論』　1992

宮本一夫　「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に－」『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989

森島康雄　「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ－大和型瓦器椀とその周辺』　1992

南中学校構内遺跡

—第２次調査—

南中学校構内遺跡第２次調査

Ⅰ　調査に至る経緯と組織

1986（昭和61）年、松山市教育委員会（以下、市教委）は、松山市東石井町670番所在の松山市立南中学校構内に体育館新営を計画した。1975年、運動場増設に伴い行われた小規模な発掘調査（第１次調査）によって、古墳時代中期の竪穴住居址、掘立柱建物それぞれ１棟ずつが検出されており、「163 南中学校遺物包含地」として松山市の指定包蔵地となっている。この第１次調査地は現在の運動場の南東隅にあたり、今回の調査地の南東150ｍの地点である。

市教委文化教育課は、同年５月、松山市長 中村時雄（当時）より提出された確認調査申請に基づきトレンチによる試掘調査を行ったところ、弥生土器を包含する土層が確認されたため、ひき続き同年５月15日から、６月21日の間を調査期間として緊急発掘調査を実施した。

調査主体　松山市教育委員会

教育長　西原多喜男
教育次長　井出　治巳
文化教育課長　伊賀　俊介
課長補佐　坪内　晃幸
第二係長　大西　輝昭
主　任　西尾　幸則

調査担当　調査員　栗田　茂敏

作業員　（屋外調査）　相原浩二・高尾和長・田中国広・中矢道秋・渡部一朗
（屋内整理）　水口あをい・西岡早苗・兵頭千恵・松山桂子・三木和代・山下満佐子

調査地　松山市東石井町670番
調査面積　290㎡
調査期間　1986（昭和61）年５月15日～６月21日

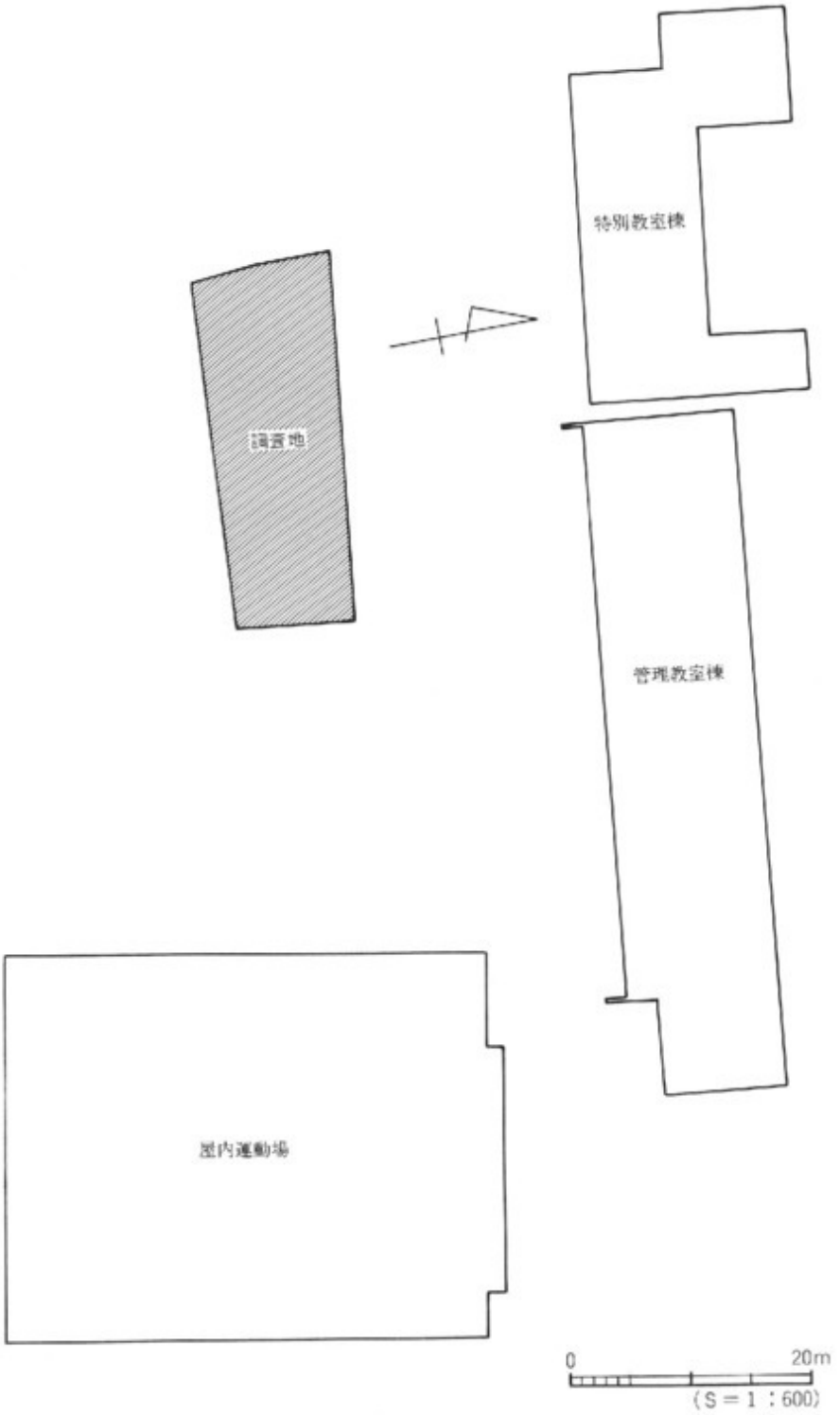


図34　調査地の位置

II　調査の成果

1．層　序（図35）

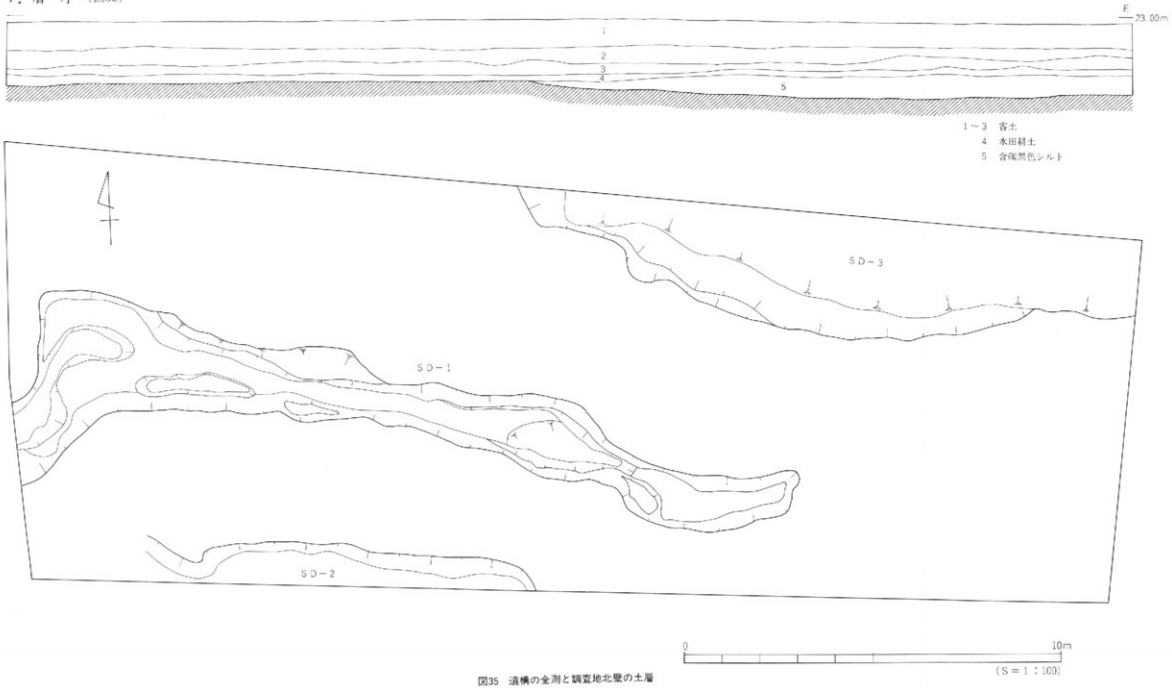


図35　遺構の全測と調査地北壁の土層

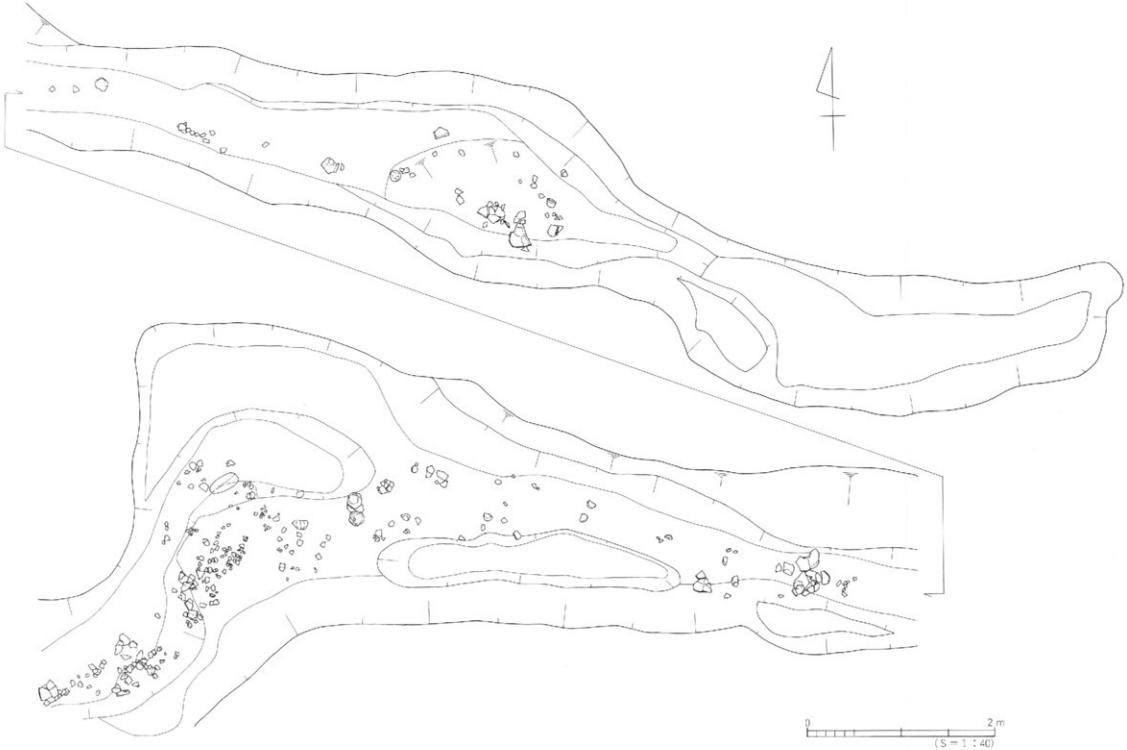


図36　ＳＤ－１遺物出土状況

調査地は、松山平野中央部にひろがる重信川の氾濫原上、海抜23mに立地している。現況が運動場ということもあって、旧水田耕土面を二度にわたって客土造成し、1mあまり嵩上げしている。水田耕土下層には無遺物の含礫黒色粘質土層が堆積し、遺構はこの含礫黒色粘土層を切り込むかたちで検出された。埋土は黒色シルトで少量の礫を含んでいる。

2．遺構と遺物

調査で検出されたのは東西溝1条と、これに平行して走り、おそらく同様の溝状になると思われるもの2基で、これらもいちおう溝として扱っている。

溝

ＳＤ－１～３（図35・36）

ＳＤ－１は東西に長い調査区の中央部を縦走する断面U字状の溝状遺構で、幅１～３ｍ、深さ30～40cm前後を測り、調査区西端から東方へ約20ｍの位置で収束している。若干の礫を含む黒色シルトによって埋没しており、通水していたような形跡はみられない。遺物はこの溝の溝底に近い部分から投棄されたような状況で検出された。時期的には比較的まとまっており、これらの遺物から弥生時代前期後半の遺構である。

ＳＤ－２は調査地南部で、ＳＤ－３は北部で検出されたもので、ＳＤ－２は無遺物であったが、ＳＤ－３からは若干の遺物が出土しており、これらの遺物からＳＤ－２はともかく、ＳＤ－３はＳＤ－１と大差ない時期のものと考えられる。

ＳＤ－１出土遺物（図37～44）

甕（１～21）　１～５は、いわゆる如意形に外反する口縁部を持つもので、口端部には刻みを施される。小破片からの復元で若干不正確さを伴うが、口径18.5～24.5cm程度の値を示す。口縁下に沈線を持たない１や、２～４条の沈線を持つ３～５があり、口端部刻み目は１・２では端面全域に、４・５では下端に施されている。

６～８は直口もしくは、若干内傾する口縁部外面の端部に接して断面三角形状の刻み目突帯が貼り付けられるもので、このうちにも沈線を持つものと持たないものとがある。これらも必ずしも正確とは言い難いが、最も大きい６で復元口径22.5cm、小さい８で16.9cmを測る。口端部には刻み目を持たず、平坦な面をなしている。この面は沈線を持たない６では他の２点に比べて比較的曖昧ではあるが、外端部には稜を持っており、一応面を意識していることがわかる。

９～11は直口する口縁端部を下った位置に断面三角形の刻み目突帯が貼り付けられ、口端部に刻み目を持たないものである。ある程度正確に口径を復元できる12で23.3cmの計測値となる。９・10では突帯下に２条の沈線を持つが、11では無文である。10では口端部直下内面に僅かな窪みが巡り、端部が内面に僅かに突出した形態となっている。

12は直口する口縁部をやや下った位置に刻み目突帯、尖った口端部に刻み目を持つ小破片、

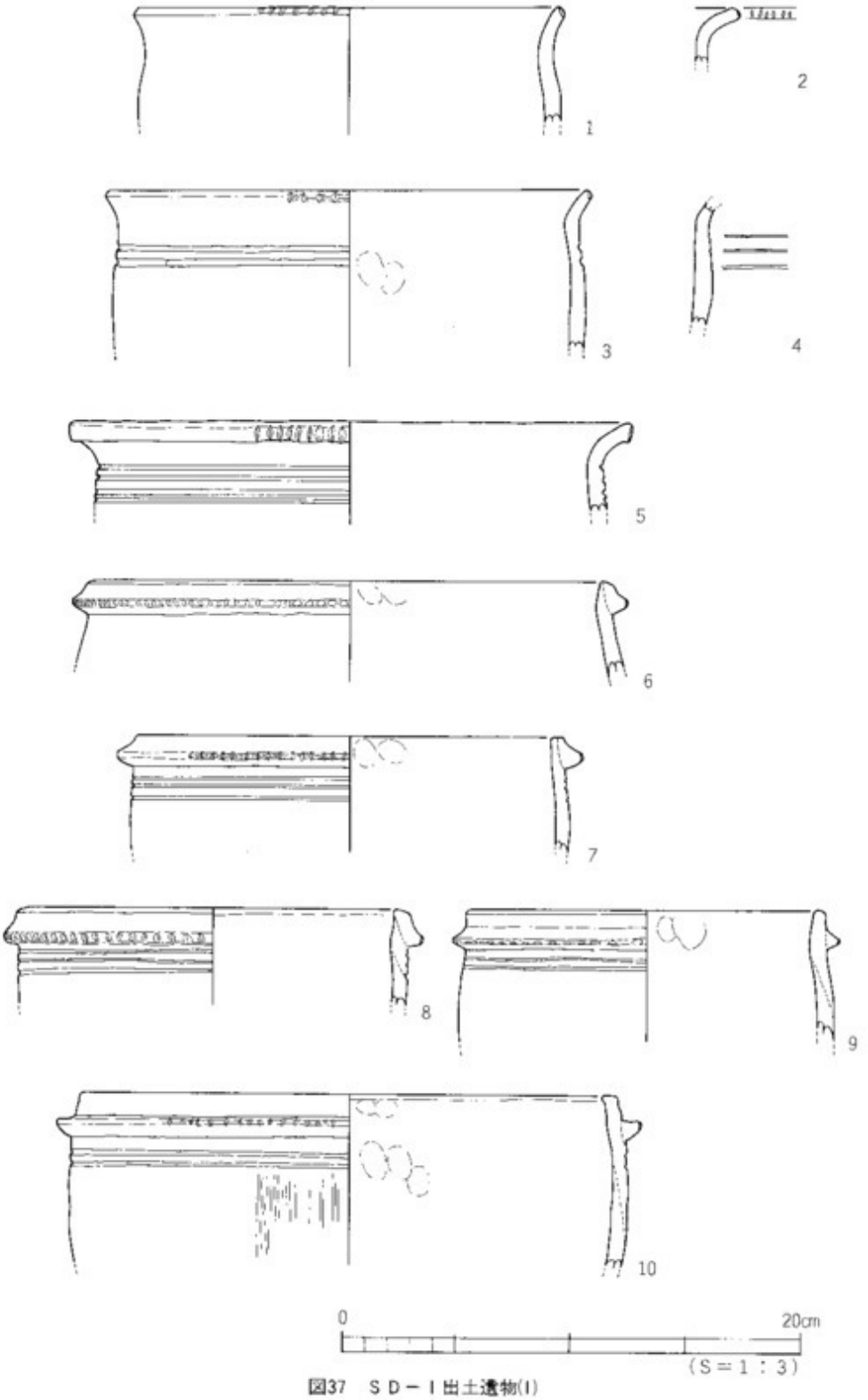


図37　ＳＤ－Ⅰ出土遺物(Ⅰ)

13は外反する口縁部直下に断面三角形の突帯を持つ小破片で、突帯には刻み目は持たない。14も一応ここでは甕として扱っておくが、直口する尖り気味の口縁部を下った位置に偏平な把手状の突起が貼り付けられるものである。これら３点は、全出土遺物のうちでもそれぞれ１点ずつの出土しかみられていない。

底部は直径７～８cmの平底、もしくは周縁部に若干の輪状の高まりを残して中央部が窪むもので、あまり突出せずすんなりと立ち上がるものが多い。20には底面中央部に直径1.5cmの

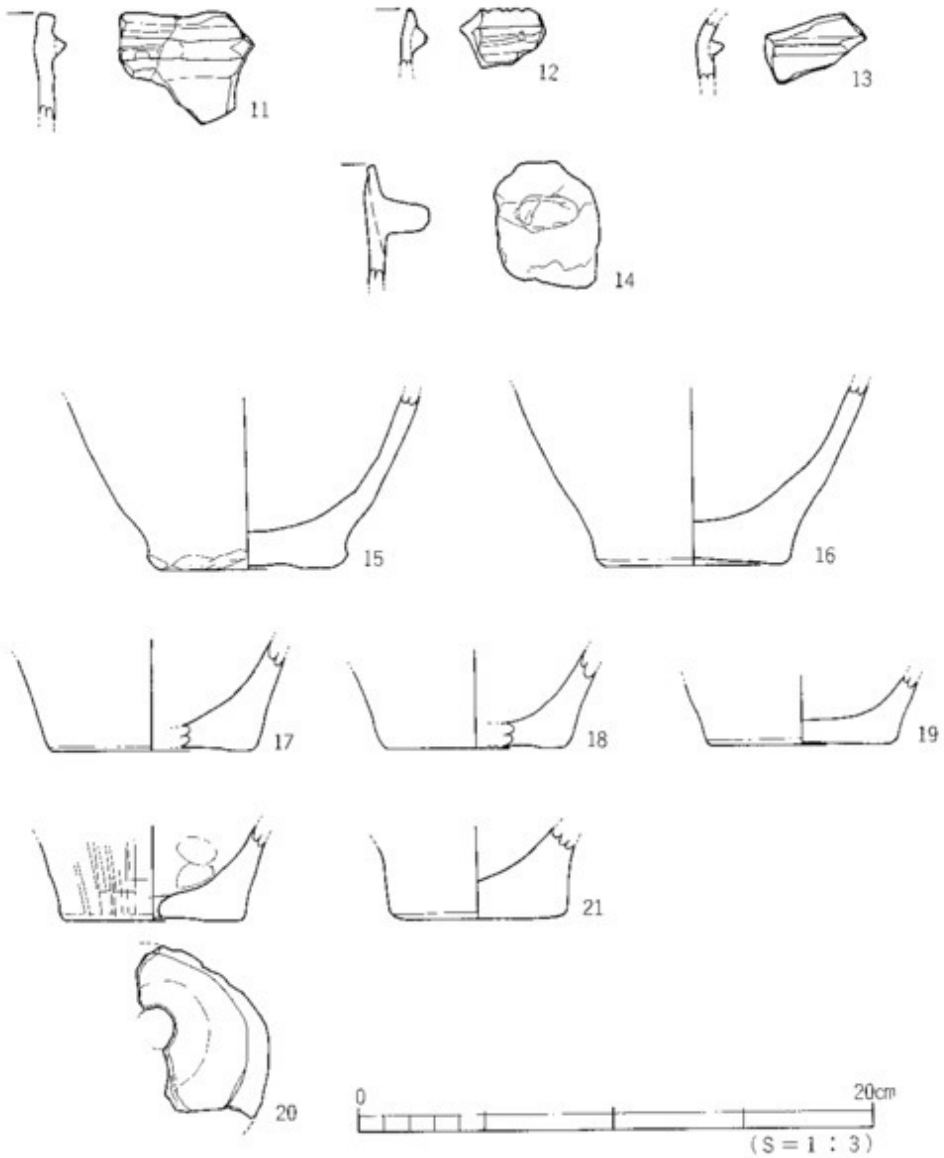


図38　ＳＤ－１出土遺物(2)

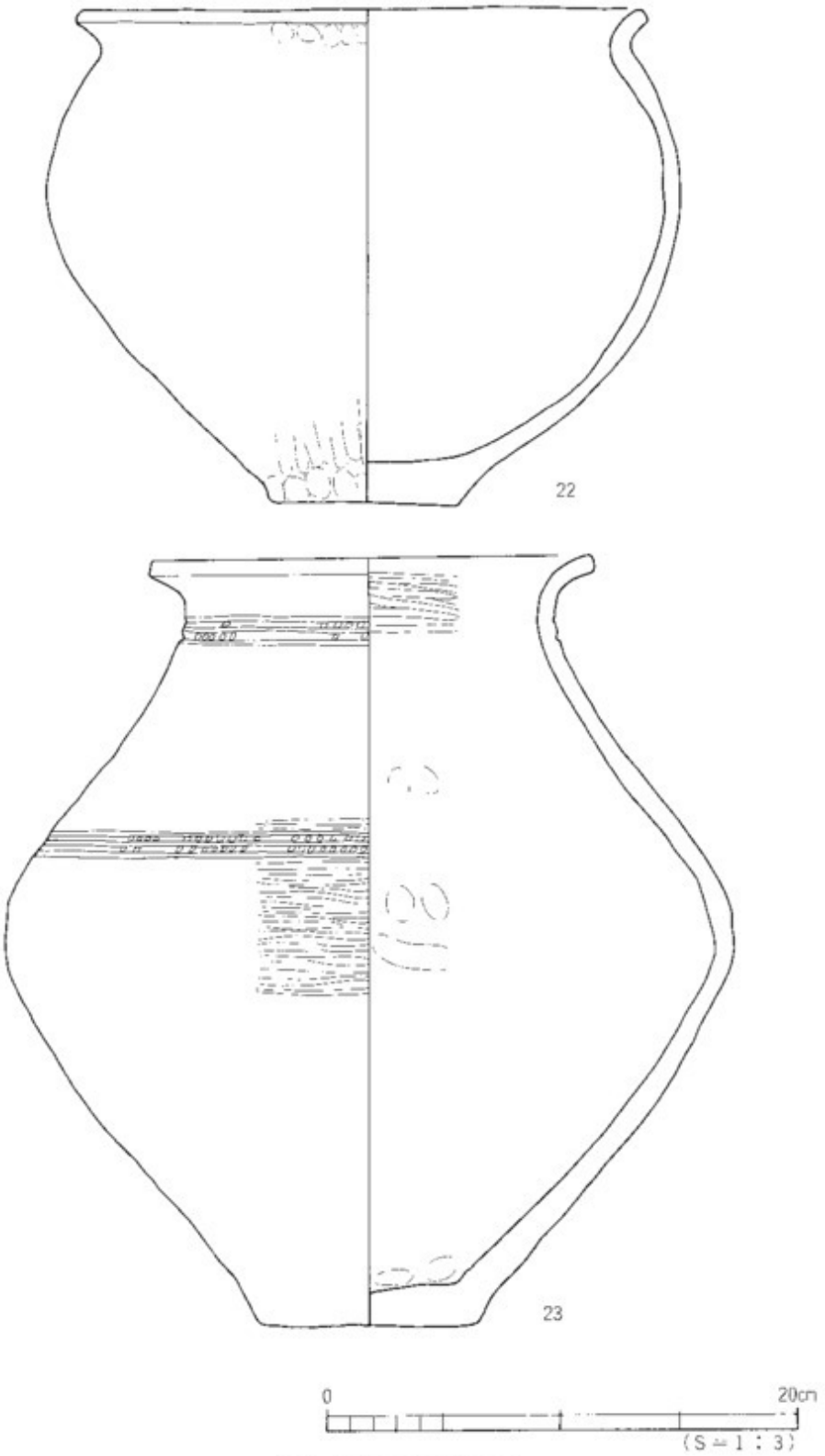


図39　ＳＤ－１出土遺物(3)

円孔が、外面から焼成後に穿たれている。

以上の甕のうち、外面調整に刷毛目の痕跡を残しているものは10の口縁部のみで、さほど明確ではないがその他のものには撫で調整が多用されているようである。また、胎土に2～5mm大の角礫、亜角礫を多く含む点はどの個体にも共通した特徴である。

鉢（22・53）　22は偏平な甕形の形態をなす鉢形土器、器高20.8cm、口径23.5cm、底径7.8cm、胴部最大径26.3cmを測る。短く外上方に折り曲げられた口縁部は端部に面を持ち、底部は僅かに突出した平底をなす。外面の胴部上位は横、下位は斜め、底部寄りには縦方向の磨きのような痕跡がみられるが、さほど入念ではなく、どちらかといえば幅の狭い撫でに近いものである。口頸部の内外面、胴部内面上位は横撫で、下位は縦方向に撫でられている。胎土は甕と同様に礫を多く含んでいる。また、53のような直口口縁の小型品の小破片も出土している。

壺（23～52）　23は器高32.3cm、口径18.4cm、底径9.2cmの復元完形品である。胴部の張りを器高の中位に持ち、その最大径は30.7cmを測る。胴張り部からなだらかにすぼまる肩部、短い頸部を経て口縁部が短く外反する。施文は頸部と肩部に行われているが、これらの施文は3条の細く浅い沈線と、これらの沈線間を埋める楕円形の刺突を組み合わせたものである。この刺突は棒状工具の先端部のようなもので行われ、部位によっては途切れる場合がある。胴張り部の外面と頸部の内面に横方向の磨きが、胴部下位外面にも斜め方向の磨きのような痕跡がみられるが、その他の部位の調整は不明瞭である。

上記の壺の他には口頸部、胴部の破片が多く、全形を窺い得るものは少ないが、口頸部形態には大きくは2通りのものが存在するようで、ひとつには上述の23や31のように内傾する頸部から短い口縁部が外反するもの、またひとつには30のような筒状の頸部に外反する口縁部を持つものである。また、34のような口径が非常に大きくなるものや、44のような小型品の出土もみられている。頸部から胴部上位の片35は肩部や頸部に施文や段を持たないが、多くの個体はなんらかの施文や段、削り出し突帯などを持っている。施文には2～3条の沈線を頸部、肩部に施されるものが多い。29・30の頸部、36の頸部・肩部、37・38の肩部などがこれによっている。また、41の頸部のように刺突を伴うものもある。削り出し突帯を持つものには31・37・39の頸部、42・43の肩部がある。これらのうち43は削り出しのみによる突帯、31は削り出した突帯に沈線を施文、その他は削り出した後突帯上下位の付け根部分に沈線を施し、また31同様突帯そのものの上にも沈線を施文している。その他、口端面に1条の沈線を施される32や口端部内面に刻み目を持つ33のようなものも出土している。

底部は平底で、必ずしも甕や鉢との区別は判断し難いが、比較的開き気味に立ち上がるものや底面の器厚の薄いものを壺として取り扱っている。これらの底部のうち52は立ち上がり外面に2条の沈線を施文されている。

壺も胎土に礫を多く含む点では甕や鉢と同様で、また観察できる範囲では器面調整には磨

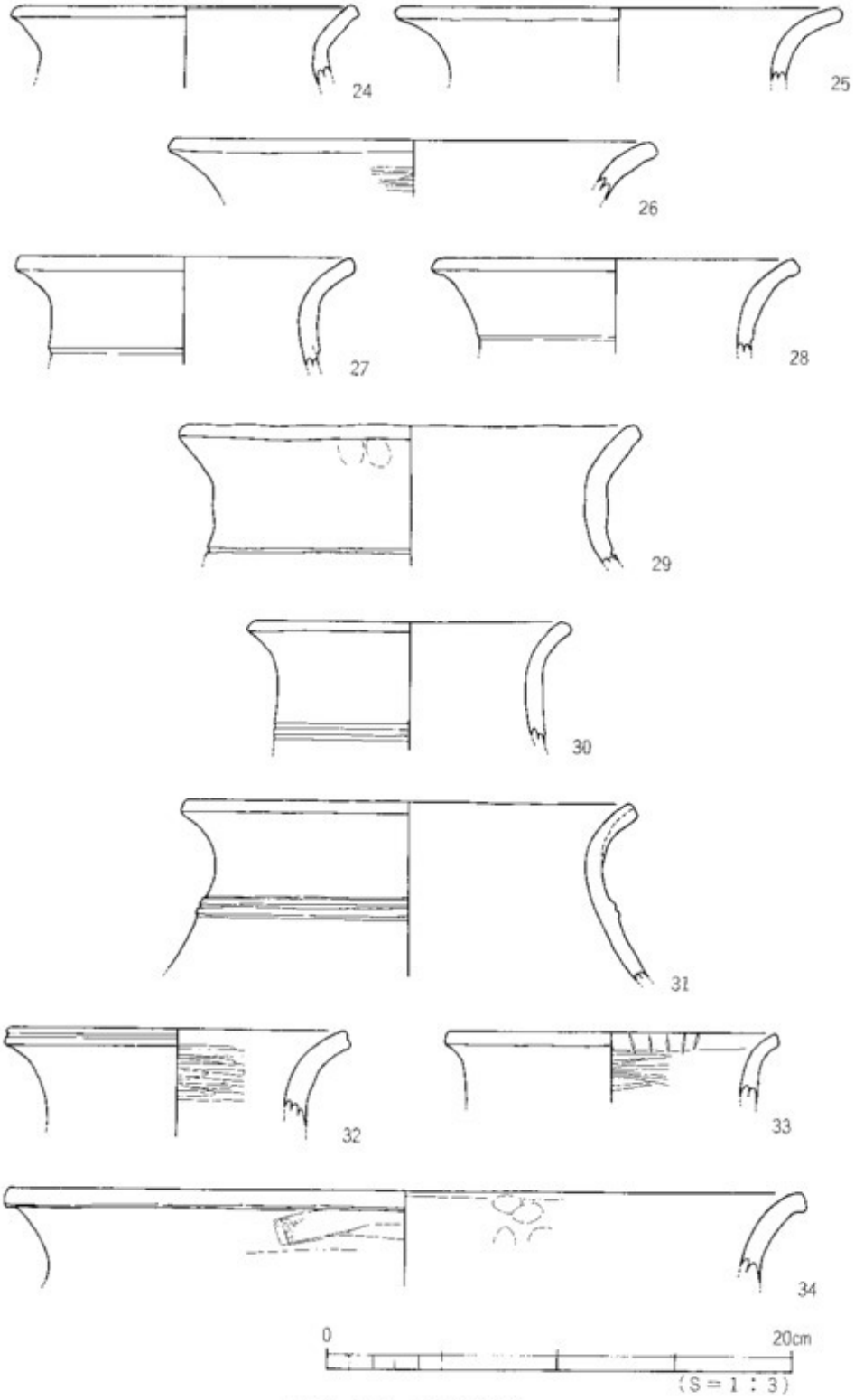


図40　ＳＤ－Ｉ出土遺物(4)

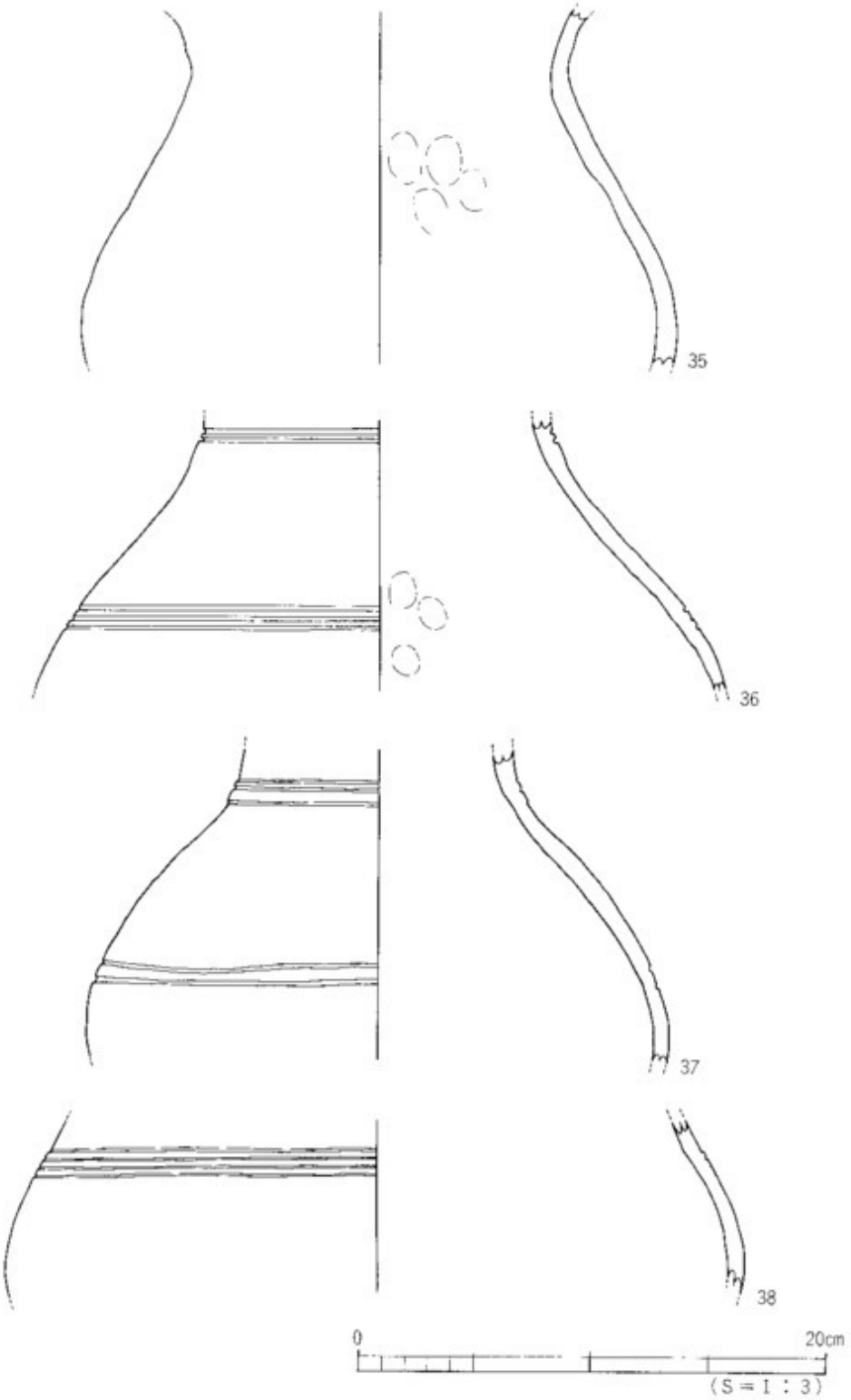


図41　ＳＤ－１出土遺物(5)

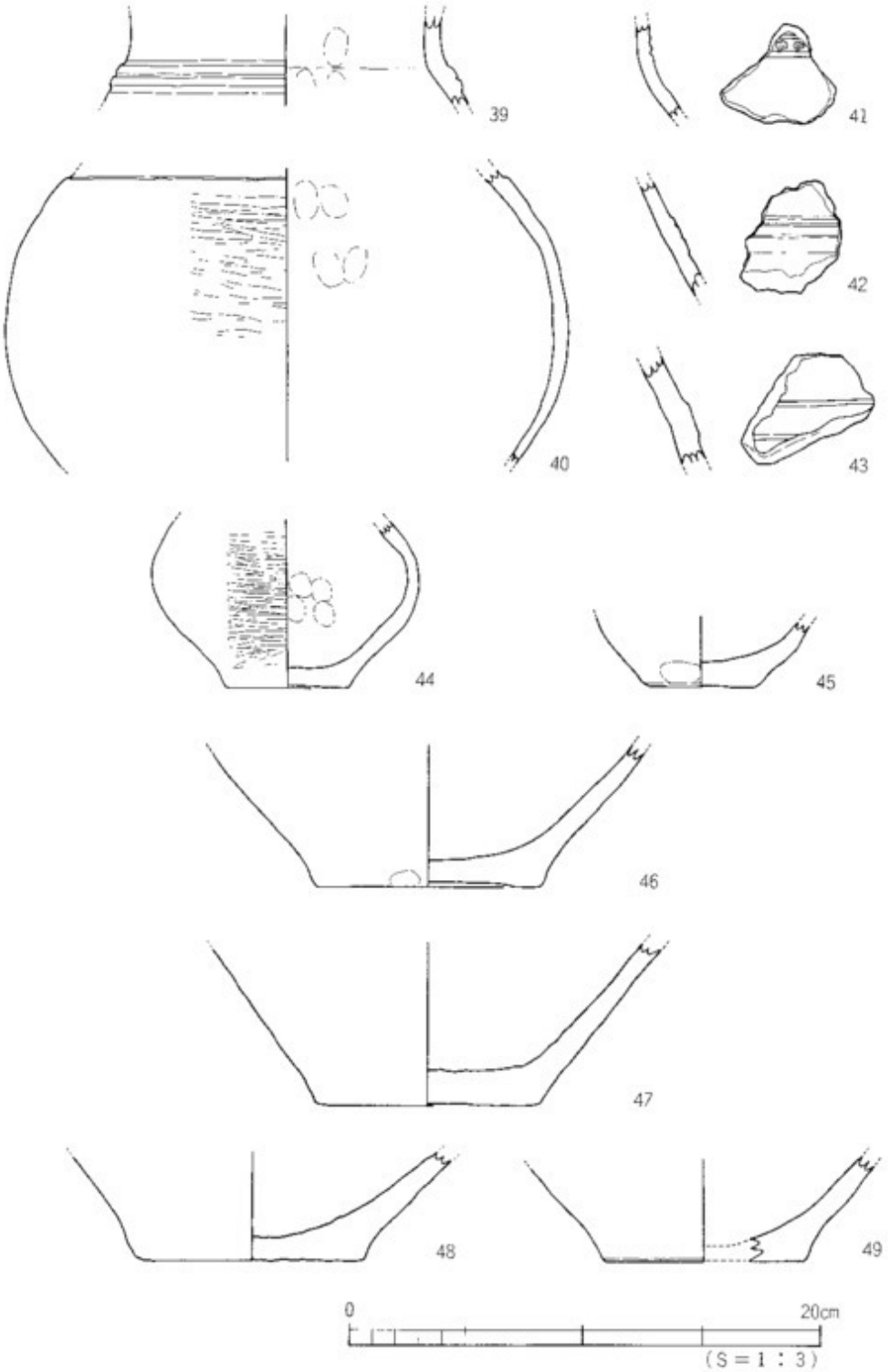


図42　ＳＤ－Ⅰ出土遺物(6)

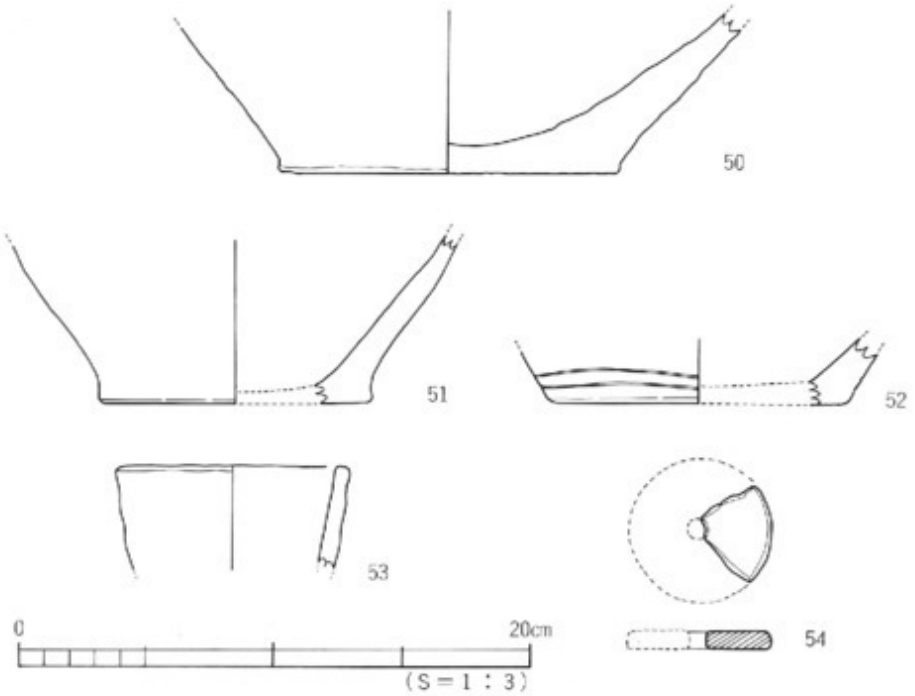


図43　ＳＤ－Ⅰ出土遺物(7)

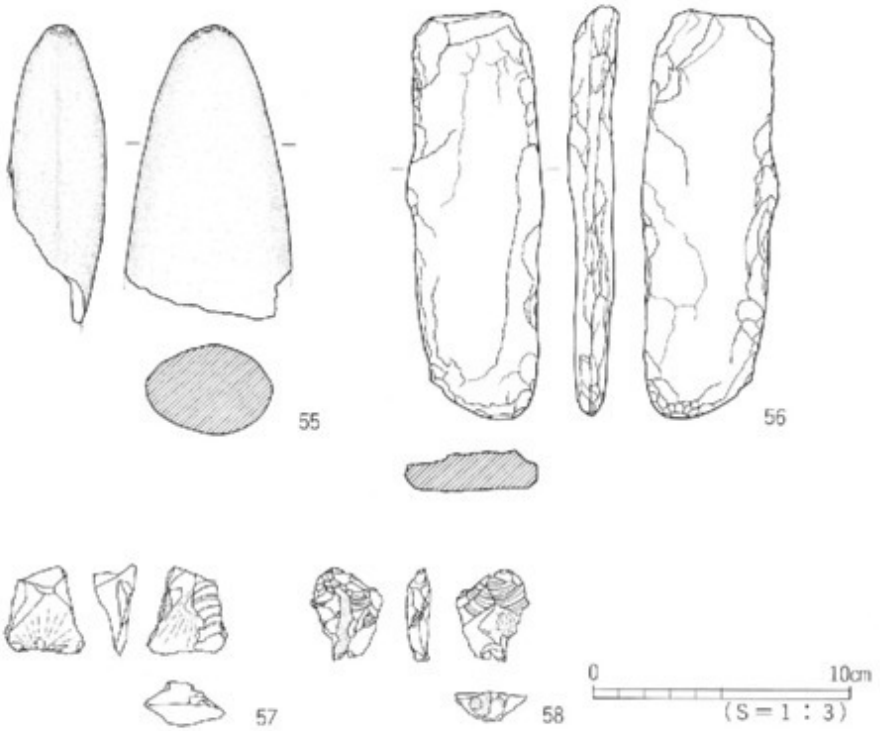


図44　ＳＤ－Ⅰ出土遺物(8)

きが多用されているようである。

紡錘車（54）　厚さ0.7cm、復元径5.5cmの粘土板中央部に焼成前の円孔を持つもので、断面形は隅丸長方形状をなす。胎土に礫を多く含む点では他の土器類と同様である。

石斧（55）　安山岩系の石材を用いた伐採斧の基部片、現況重量340ｇを量る。

土製具（56）　長さ15.8cm、最大幅5.3cm、最大厚1.4cmの短冊形、重量205ｇを量る。基端部を除く周縁部全面に敲打を施し、形態を整えている。安山岩製。

石核（57・58）　サヌカイトの57、姫島産黒曜石の58の２点が出土している。

ＳＤ－３出土遺物（図45）

鉢（59・60）　59は復元口径22.6cm、60で17.6cmを測る。折り曲げにより短く外反する口縁部は端部に刻みを持たない。

甕（61～63）　口端部に刻み目を持つ口縁部小破片61と平底の底部片62・63の３点が出土している。

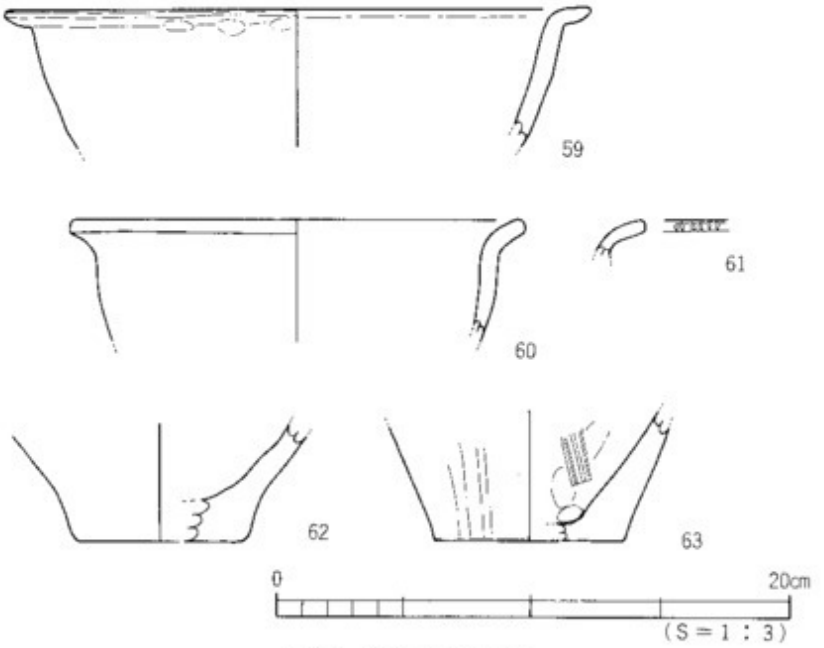


図45　ＳＤ－３出土遺物

III　まとめ

調査では弥生時代前期の遺物を伴った溝状遺構が検出された。この溝の性格は不詳ながら遺物の一括性は高いものである。出土した土器について簡単にまとめておくと、個体特定が可能な100点あまりのうち、約60％が壺、40％が甕で鉢の出土が２点ある。壺の施文部位は、口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境、胴部上位で、施文には１～４条の沈線、削り出し突帯、弱い段などがあり、どちらかといえば横方向の沈線を多用する傾向があって、削り出し突帯と沈線を併用するものもある。

甕の口縁部は如意形に外反するものが最も多く、次いで口端部に接して断面三角形状の刻み目突帯が貼り付けられるものがあり、口端部をやや下った位置に突帯が巡る下城式に類似したものがこれに次いでおり、この時期の甕形土器が複数の系譜のもので構成されている様相がわかる。施文は壺と同様１～４条の沈線を頸部に施されるものが多い。器面調整に刷毛目が観察できるものは１点のみである。

西部瀬戸内の弥生時代前期後半～末は多重の沈線を持つ甕に代表される「阿方・片山式」土器を標識としているが、本調査出土の土器類はこれに先行するものと考えられ、前期前半と末との間を埋める資料として評価されよう。

最後になったが、資料の整理にあたって梅木謙一、水口あをい両氏の多大な協力と助言を得た、記して謝意を表したい。

抄　録

ふりがな	いしいようちえんいせき　みなみちゅうがっこうこうないいせきだいにじちょうさ
書名	石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡第２次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第45集
編著者名	栗田茂敏
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791　愛媛県松山市南斎院町乙67－6　TEL 0899－23－6363
発行年月日	西暦　1994年　8月　31日

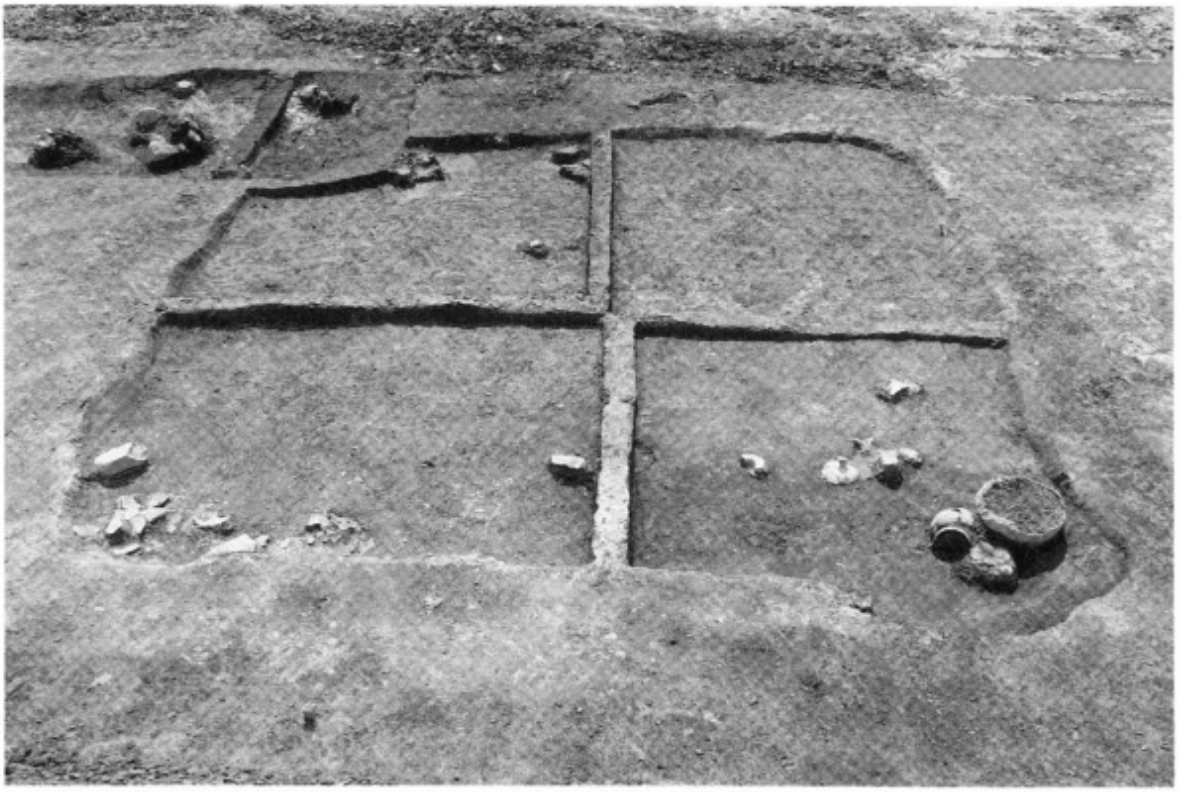
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いしいようちえん 石井幼稚園	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 にしいしまち 西石井町	38201		33° 48′ 36″	132° 46′ 36″	19850620～ 19850710	430	幼稚園舎改築に伴う事前調査
みなみちゅうがっこうこうない 南中学校構内 だいにじ 第２次	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 ひがしいしまち 東石井町	38201		33° 48′ 15″	132° 46′ 43″	19860515～ 19850621	290	体育館新営に伴う事前調査

所収遺跡名	種・別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石井幼稚園	集落	古墳	竪穴住居　1棟	土師器壺・甕・高杯 碧玉製管玉 滑石製臼玉 砥石	
		平安	溝　1条	土師器杯・皿・鍋 緑釉陶器・灰釉陶器 須恵器・土錘	
			土壙　1基	土師器杯	
		中世	土壙　1基	須恵器甕・瓦器椀 土師器椀	
			柱穴	土師器杯・椀	
南中学校構内 第２次		弥生	溝　3条	壺・甕・鉢 紡錘車 石斧・土掘具	

石井幼稚園遺跡
図　版

調査前全景（東より）

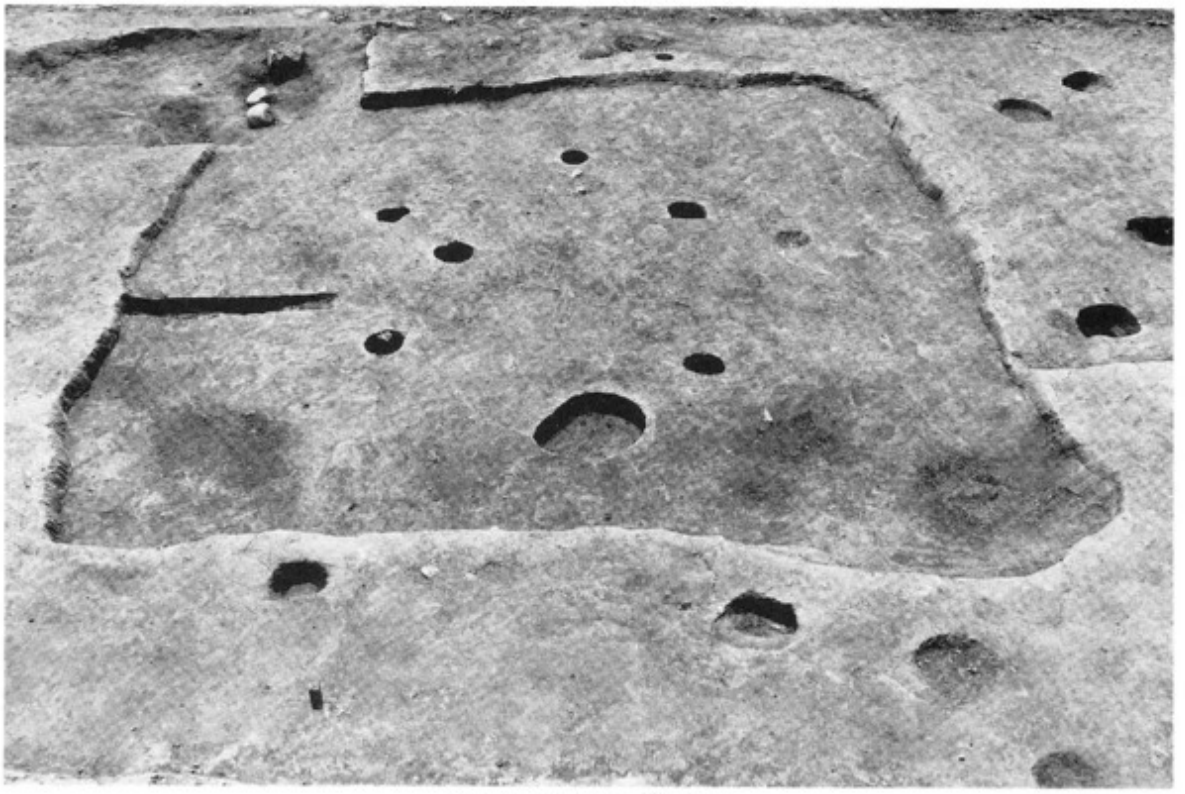
調査前全景（西より）



ＳＢ－１遺物出土状況(1)（東より）

ＳＢ－１遺物出土状況(2)（南より）

ＳＢ－Ⅰ遺物出土状況(3)（南東より）

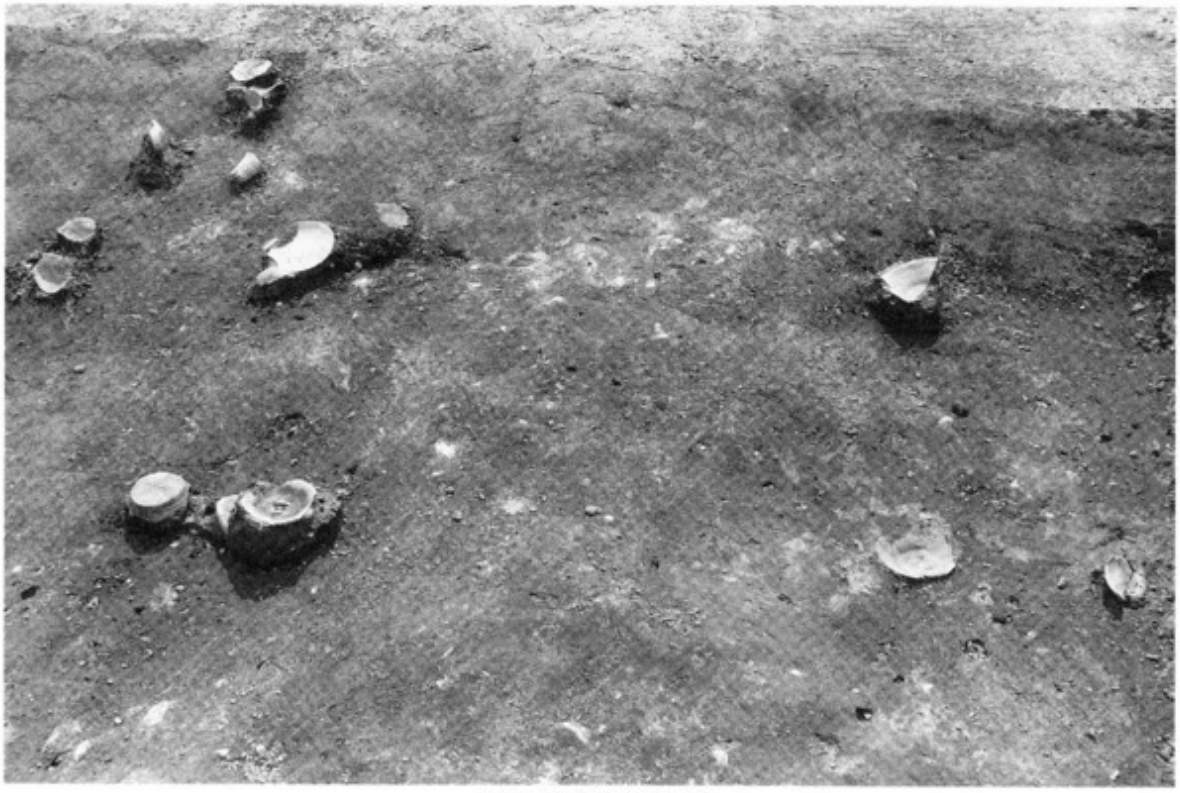


ＳＢ－Ⅰ完掘状況（東より）

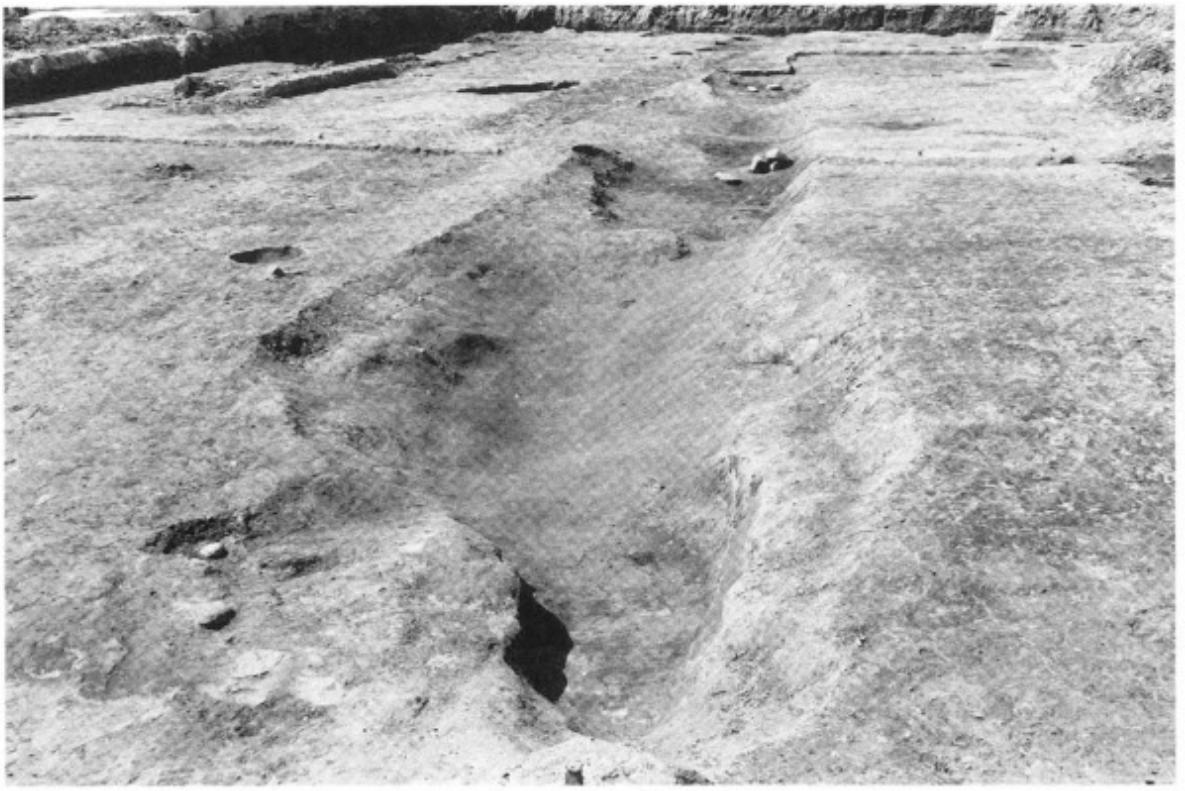
ＳＤ－１遺物出土状況(1)（南より）

ＳＤ－１遺物出土状況(2)

ＳＤ－Ｉ遺物出土状況(3)



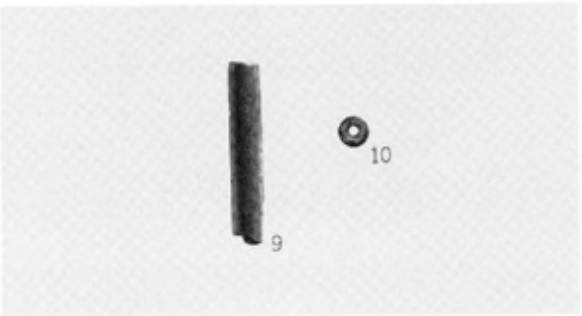
ＳＤ－Ｉ遺物出土状況(4)



ＳＤ－１完掘状況（南より）

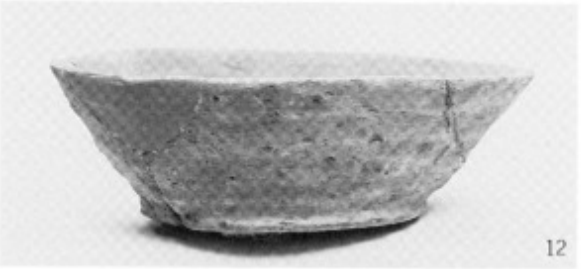
ＳＫ－２遺物出土状況（北より）

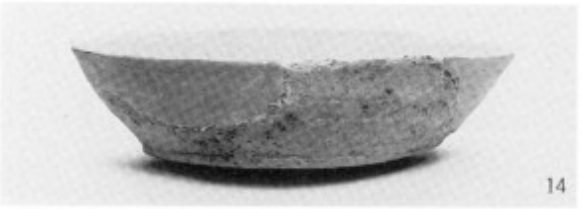
ＳＢ－１出土遺物(1)



ＳＢ－Ⅰ出土遺物(2)

11

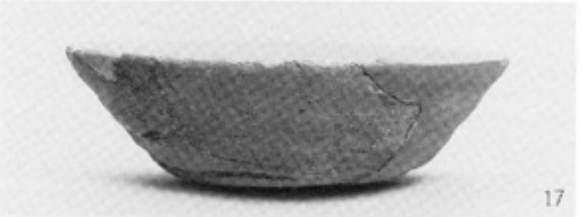

12

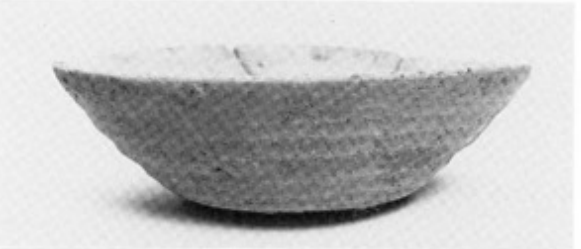

14

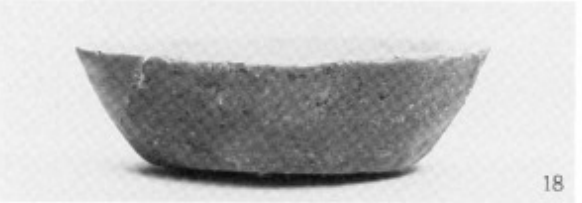
13

16

15


17




18

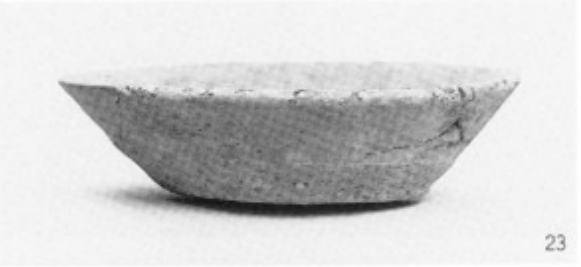
21

19

20

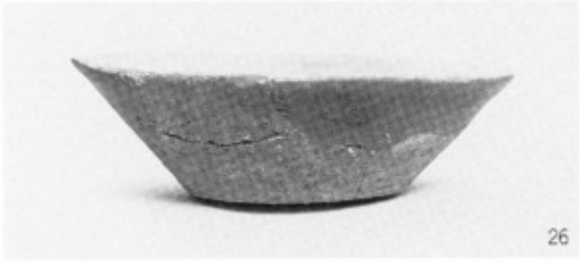
ＳＤ－１出土遺物(1)

22

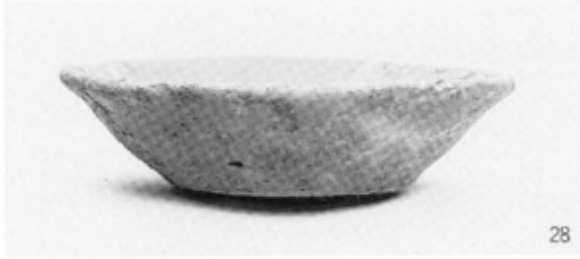

23

24

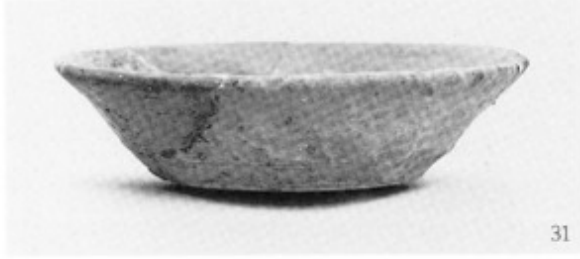
25


26

27


28

29


31

32

33

41

ＳＤ－１出土遺物(2)

ＳＤ－１出土遺物(3)

ＳＤ－Ｉ出土遺物(4)

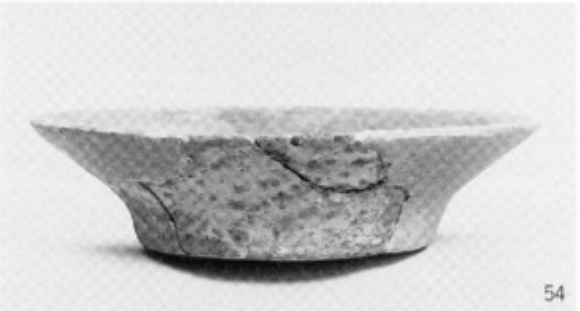
49

50

51

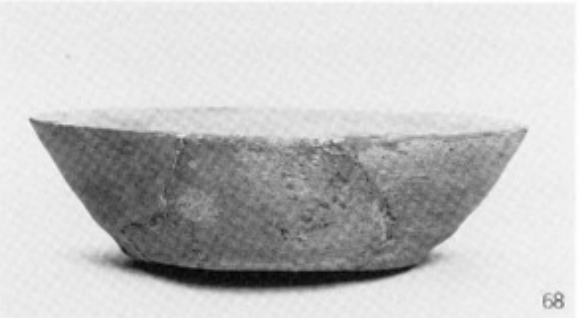
52

53


54

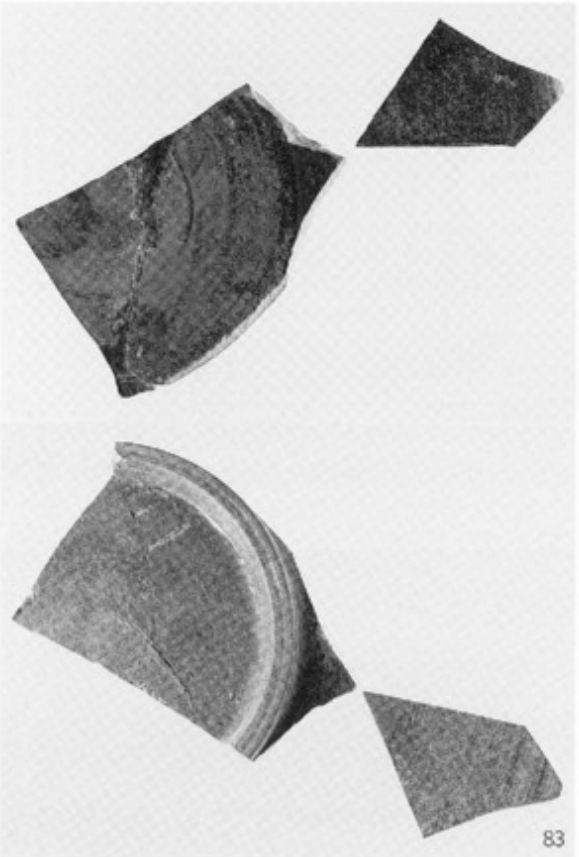
66

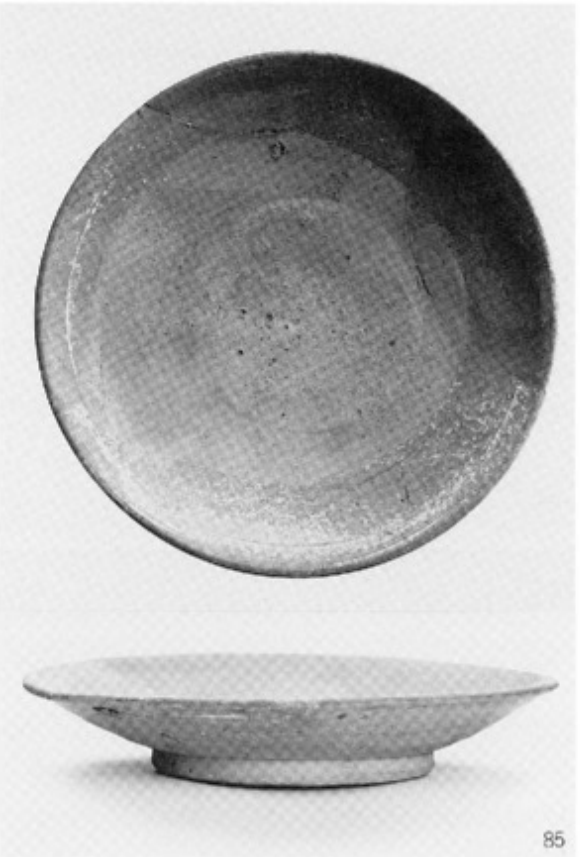
67


68

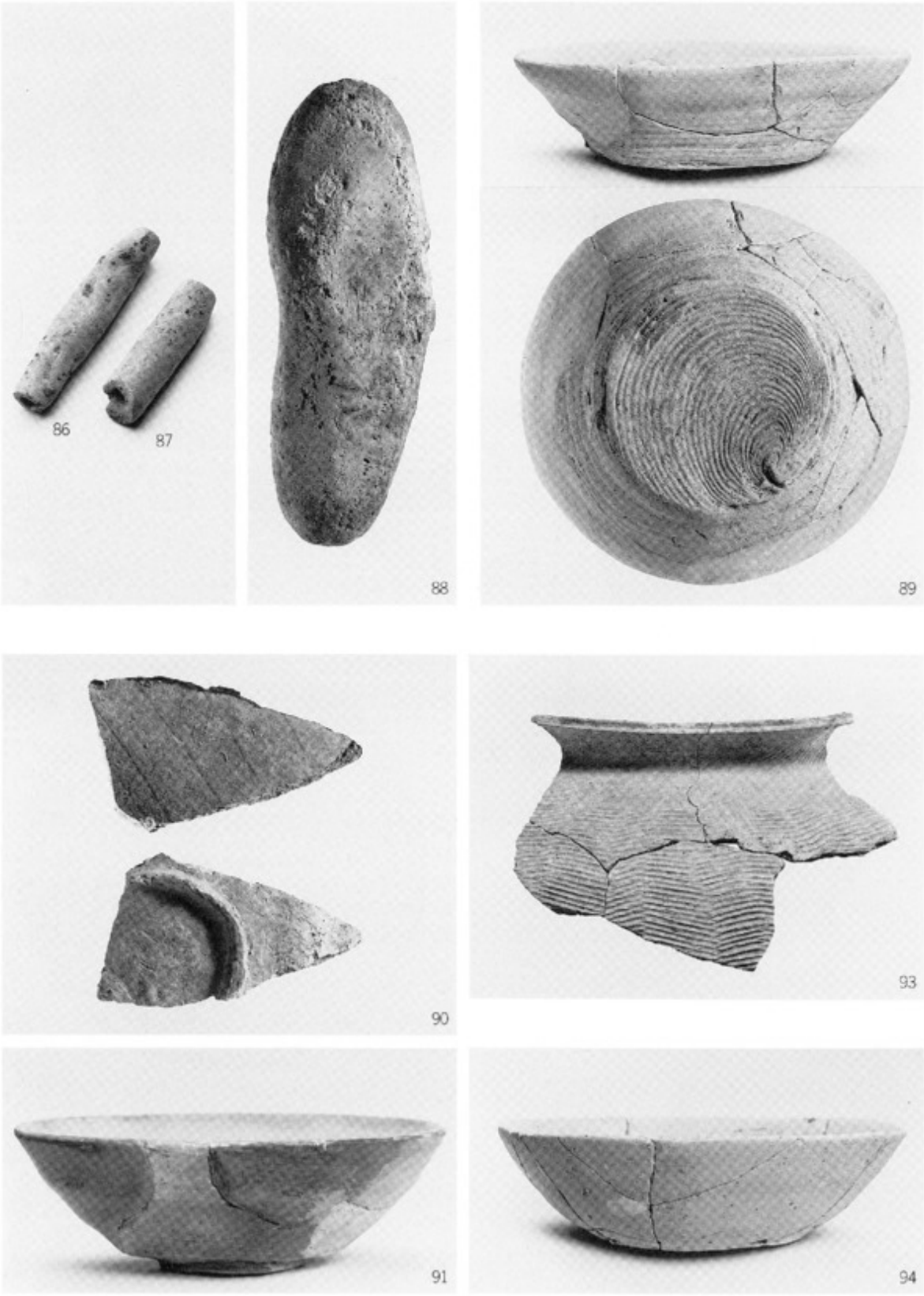
ＳＤ－１出土遺物(5)

ＳＤ－１出土遺物(6)





ＳＤ－１出土遺物(7)



出土遺物（86～88：ＳＤ－１、89：ＳＫ－１、90・91・93：ＳＫ－２、94：Ｐ－３）

南中学校構内遺跡

―第２次調査―

図　　版

調査前全景（南西より）

調査前全景（北東より）

ＳＤ－１遺物出土状況(1)（西より）

ＳＤ－１遺物出土状況(2)

ＳＤ－１遺物出土状況(3)

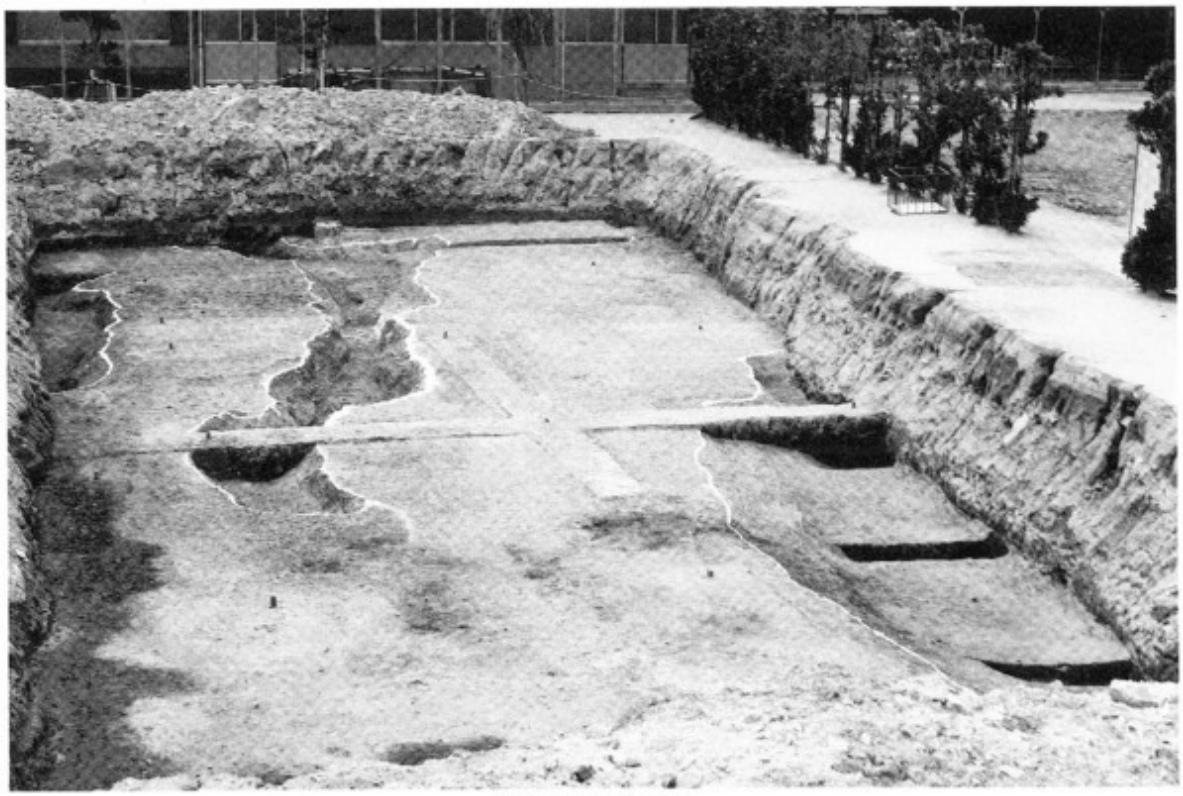
ＳＤ－１遺物出土状況(4)

ＳＤ－Ｉ遺物出土状況(5)

ＳＤ－Ｉ遺物出土状況(6)

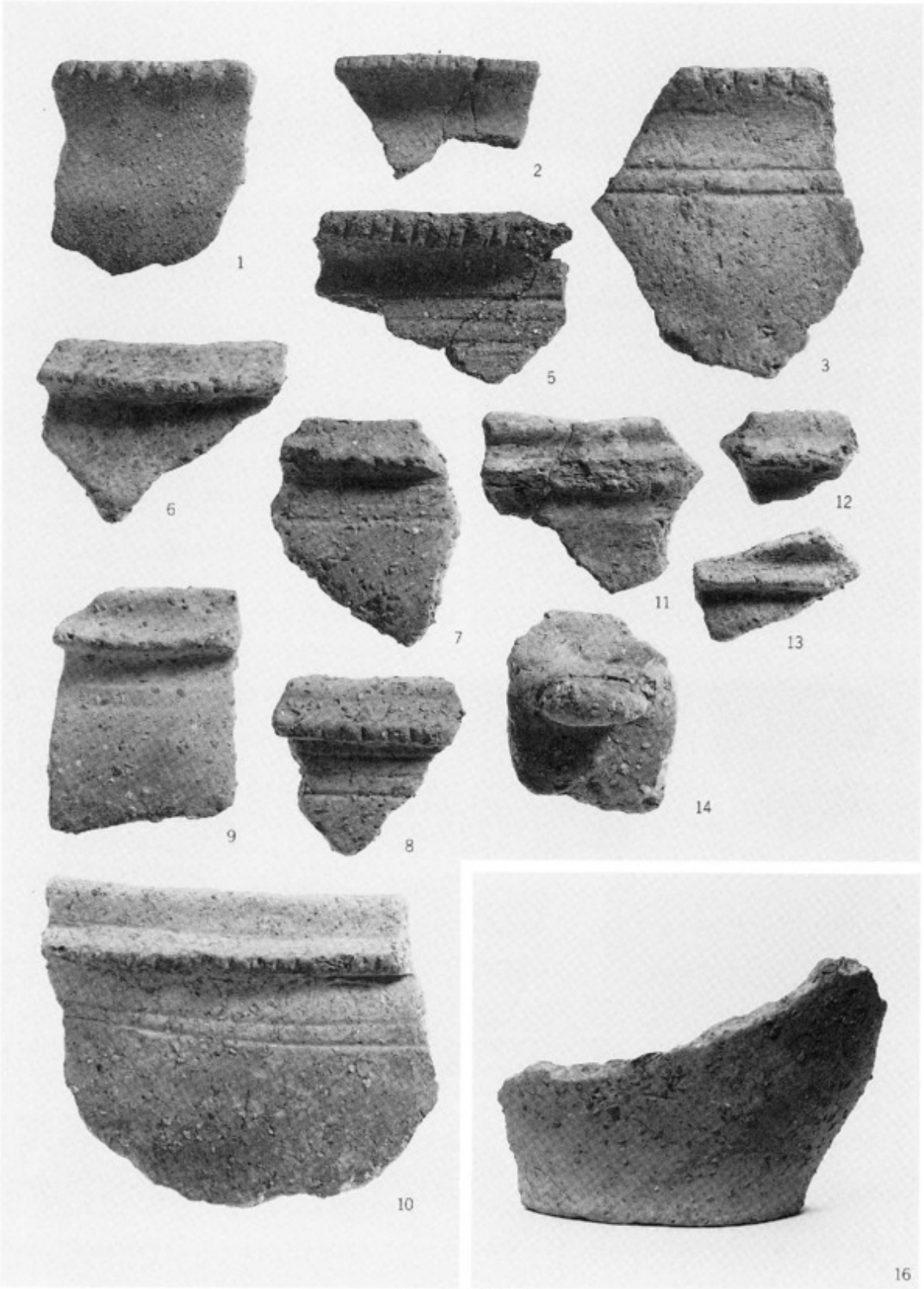
遺構全景(1)（北西より）

遺構全景(2)（北より）

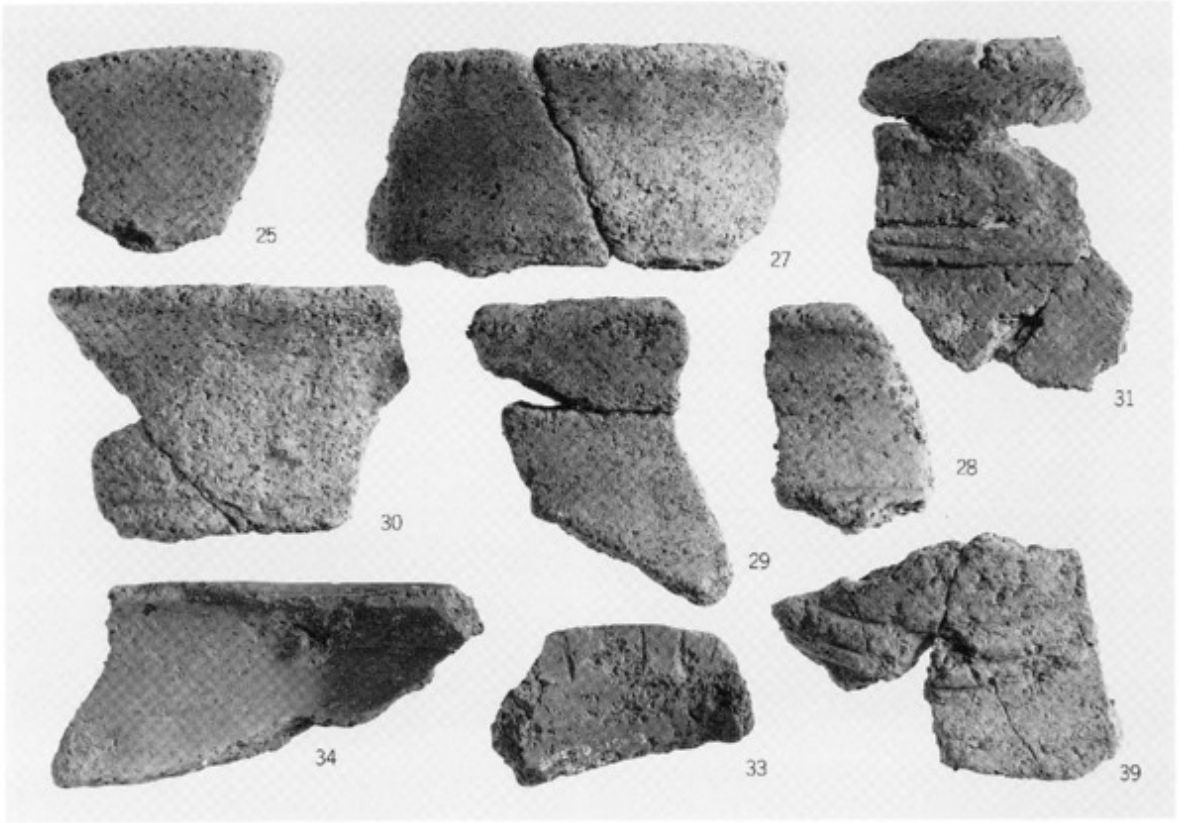


遺構全景(3)（東より）

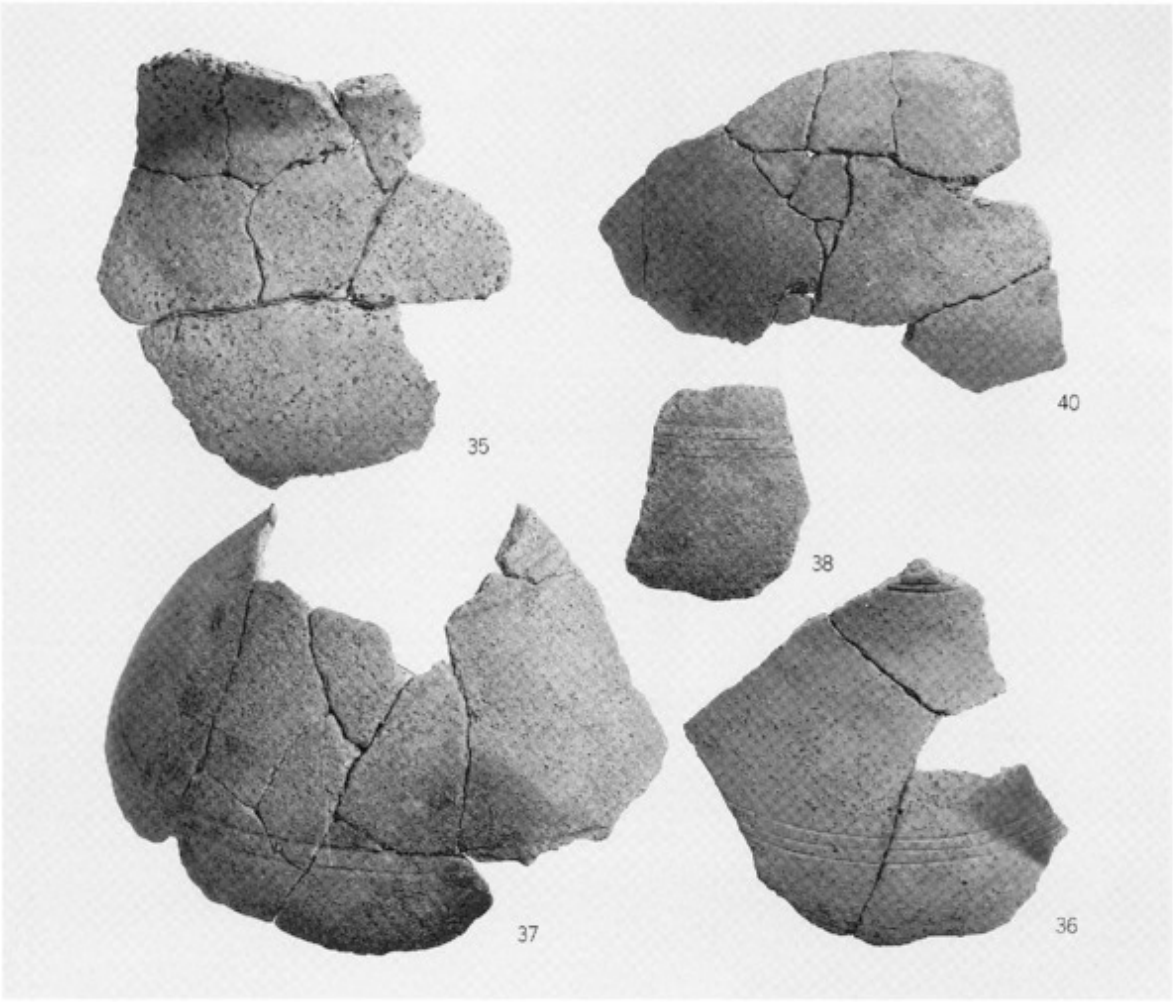
遺構全景(4)（西より）



ＳＤ－１出土遺物(1)

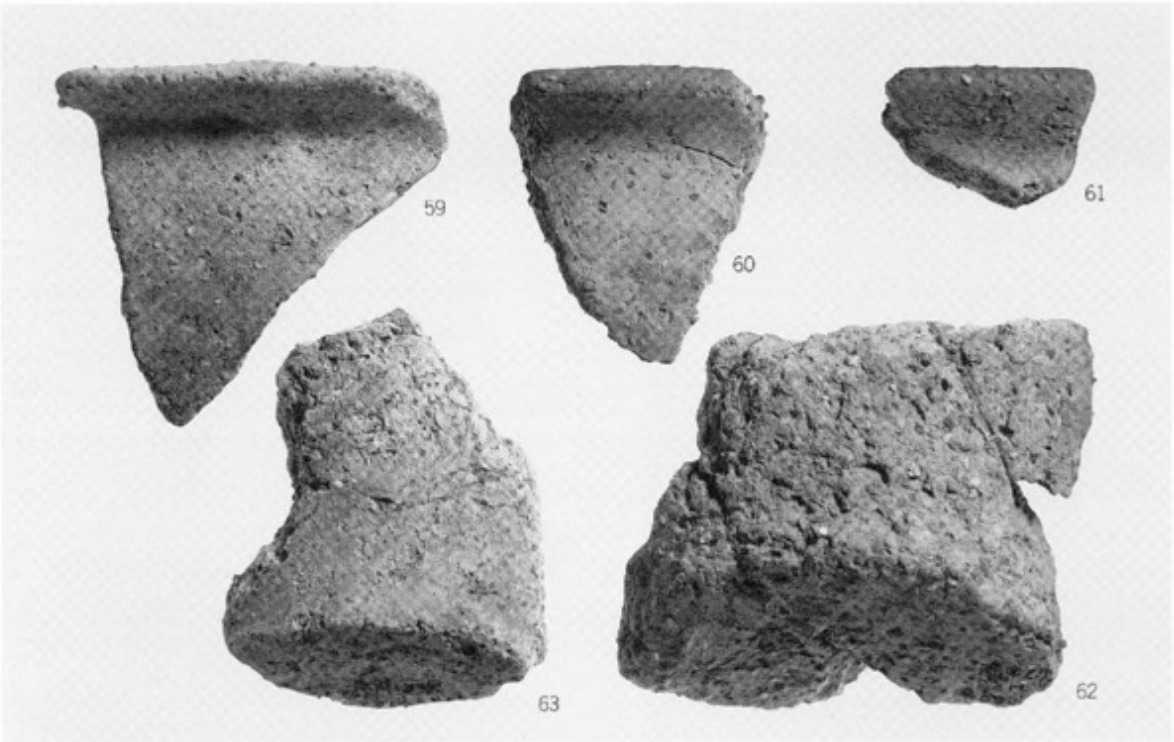


ＳＤ－Ⅰ出土遺物(2)



ＳＤ－１出土遺物(3)

ＳＤ－１出土遺物(4)



ＳＤ－３出土遺物

松山市文化財調査報告書　第45集

石井幼稚園遺跡

南中学校構内遺跡—第2次調査—

平成6年8月31日　発行

編集
発行　松山市教育委員会
〒790 松山市二番町4丁目7－2
TEL (0899) 48－6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (0899) 23－6363

印刷　岡田印刷株式会社
〒790 松山市湊町7丁目1－8
TEL (0899) 41－9111